社會學要綱

(最新改訂版)

松本潤一郎著
文學博士

乾元社

0033563000

0033563-000

361-M348s2-(t)

社会学要綱

松本潤一郎・著

乾元社

最新改訂版
1948

AGA

松本潤一郎著

社會學要綱

（最新改訂版）

乾元社

361
M348r2
(t)

国立国会図書館

国立国会図書館
29.6.25

333056

序

本書は、著者の舊著『社會學要綱』の新々改訂版であつて、大學、高專諸學校における社會學教科書たらしめたい目的から成つてゐる。そこで、內容は、現代社會學の一般問題の叙述と、これを叙述して組織的たらんことを期したのであるが、その際、著者の社會學に關する基礎的見解は、舊著や、前回の改訂版におけると同じく、およそ、次の如くである。

著者は、現行社會學が社會集團、社會過程の抽象的研究として所謂形式社會學であるばかりでなく、社會の構造物、すなはち社會形象の考究を加へ、且また、それ等諸方面の具體的考察をも、その領域たらしめたいとする。形式社會學外の研究が文化社會學の旗旆の下に現に盛んであることは、周知の事實であらうと思ふ。したがつて、著者は、形式社會學と文化社會學とを、獨自の立場において綜合する統一的體系を提出するのであるが、しかもそれ以外、二三の附帶的部門までを、社會學的研究範圍として認めつつある。これ等の點において、著者は本邦從來の諸學者と少しく異なる立場に立つ者であつて、社會學を嚴密なる個別科學と見ることから離

れて、むしろこれを體系的一科學と認めんとする。現行社會學の研究と理論とに對し正しく妥當せんとするかぎり、著者の採る立場は學界一般の支持を贏ち得ると確信するものであるが、海外學界の最新傾向が、次第に著者の見解に一致し來たつて居ること、また本邦同學諸氏の意向の如きも、漸次、私見に接近しつつあることは、著者の大いに欣びとするところである。

社會學の諸理論中、主要なる既定學說はこれを適當に攝取して居るが、同時に現狀にあつて不可避的なこととして、著者は多數の批判的、且つ獨創的概念と理論とを提出するにいたつてゐる。その主要なる點を云へば、

一、社會集團の概念を改めて、社會過程の展開する地盤としての單なる人間範圍となし、その組織形態をもつて社會形象に屬する一事實たらしめる見方に出でた。社會集團に關する從來の取扱の混亂はこの手續によつて免がれ得るとする。

二、社會集團におけるかのゲマインシャフト、ゲゼルシャフトの二大原理を類型視することを止め、これらを構成原理と見做した。しかして、集團構成原理が問題たるかぎり、その最も基礎的なる相互的接側の新原理を導入し、これによつて所謂集團外的關係（過程）といふ見解を止揚した。

三、社會過程が個人生活の他の面である點を、行爲の社會化に關して立證した。若干種類の社會過程を限つて、個人生活に對立せしめる見方をもつて不充分なりとし、人間生活を擧げて社會的觀點から考察する態度を採つた。

四、これと同時に、ヴィーゼに見られる社會過程の汎關係現象觀を相對化した。社會關係現象の概念を認識手段に他ならずとするのであつて、これを高々價値關係的概念だとなすに止める。

五、所謂基礎的社會關係なるものを、社會集團の構成諸原理と社會關係現象の諸種類とに分かち、後の場合について、和合、敵對、上下諸現象といふ諸類型を提出するにいたつた。

六、社會構造物、すなはち社會形象は、その內容、關係の複雜してゐることから、從來最も多義的であつたのであるがデュルケム並に米國文化社會學諸家の見解を發展せしめ、これをひろく人間行爲の標準的雛型と認め、他方それに參與する文物に對しては附帶的意義を許し、これによつて社會過程との連接を果たした。

七、社會形象の內容たる社會制度、思想形態、社會的自我意識等々の諸要素、並にそれ等のものの屬性たる社會性、社會秩序、社會組織の諸事實について、これらを相互に區別し顯現した。また史觀の問題に關して歷史主義の立場につくとともに、これを理論的に基礎附ける試みに出でた。

本書が大學、高專諸學校の社會學教科書の體裁をなすことは既に云つたが、著者自身、前著を二三の學校に教材として使用した過去十數年に亘る經驗がその改訂を思ひ立たせたのであるが、これと同時に、前著を全國數多の大學、高專諸學校に教科書乃至教材として採用された關係教官諸氏より好意ある指示にも接してをつたのであるから、ここに叙述及び形式上の刷新を實行することになつたのである。新改訂版においては前著における說明を一層簡明ならしめ、特に、新時代に適する講述としたのであつて、これによつて教授上、幾多の便宜の開けたことを信じてゐる。

本書を教科書として採用される向の增加したに鑑み、著者として一言使用上の注意を述べたいと思ふ。本書は一般問題を簡潔に述べたのであるが、講義に於いて實際上要求されるところは、かかる理論的形骸だけを教授するに止めず、それに對し肉を盛り血を通ずる意味をもつて、學徒に對して社會學的教養を與ふることにあらう。本書を使用する教官諸氏は、歷史上に且又現實生活に取材して理論の說明に當られるのが望ましい。しかしてその際、理論の事實的說明だけに終らず、理論の延長として實踐生活への批判と生活改善への示唆とが願はしいのである。學徒をして社會學的知識の消極的吸收消化以上、社會諸事象に對する積極的な觀察實驗と活潑なる推理應用の風を養成することは、これ社會學が一個の科學的認識たる以上、貴重なる社會的識見として指導的國民教養上に有效性を發揮する所以であらう。

又、本書を教室內に使用される場合、技術的問題として注意を願ひたきは、

一、社會學專攻學生の場合以外、第一篇の內第三章は割愛して差支なく、第二章もまた重要點だけに止どめ得ること

二、教授時間數によつて、本文一字下げ九ポイント活字の個處は除外し得られること

三、第五篇各章もまた、右に準じ得ること

四、都合によつて、第三篇第三章は第四篇第三章の後に組入れ得ること、

等である。

舊著第一、二版に附錄とした「日本社會學の沿革」の一篇は、その第三版以後は削除したのであるが、これはその後社會學研究手引とも云ふ可き『日本社會學』を刊行するに當つて、加筆訂正を行つてその方に收錄してゐる。その書は本邦社會學の歴史と鳥瞰圖たるのみならず、社會學的諸問題に關する參考書、關係文獻の檢索に役立つ性質を持つ。また、今回の改訂版においても簡潔に叙述した諸問題、理論に就いては著者は『社會學原論』『集團社會學原理』『文化社會學原理』の體系的三部作にその委曲をつくしたのであるから、これが本書に對する教官用書として役立つことは勿論、少しく專門的研究に志ざす讀者においては、本書に併せて右三著を研究されんことを望みたい。

最後に、舊著出版以來公私の機會に於いて同學諸氏、關係諸教官より寄せられた好意ある紹介、批評、助言に對し、又日本圖書館協會が本書を推薦圖書中に加へられたことに對して、改めて深い感謝の意を表するとともに、舊著が時潮社大内義明君の慫慂によつて成り、前回の改訂版が同君の參加した日本評論社より發兌せるを、今回同社の好意ある態度によつて、著者の同郷の友人株式會社乾元社、梅田道之君の手によつて、この新々改訂版の公刊せられた喜びを附言したいと思ふ。

昭和二十一年春

熊州の旅寓先において

著者

目次

序……一
第一篇　序　說……一五
第一章　社會問題……一七
社會問題と社會學……(一七)　社會問題の刺戟……(一七)　社會學の立場……(一八)　社會問題……(一九)
その內容……(二〇)　對應諸方式……(二〇)　社會政策と社會事業……(二一)　社會運動……(二二)　社會
思想……(二二)　社會政策、社會事業と社會學……(二三)　社會運動と社會學……(二四)　社會思想と社
會學……(二四)
第二章　社會學……二六
その實在科學性……(二六)　專門諸科學……(二六)　個別科學と特殊科學……(二七)　社會學の形成……
(二八)　社會總體學か嚴密な個別科學か……(二九)　社會學の定義……(二九)　縱の諸部門……(三〇)
純粹社會學と現實社會學……(三一)　實踐社會學……(三二)　社會學史と社會科學の論理學及方法論……
……(三三)
第三章　社會事象……三五
社會或は社會座話……(三五)　社會の擴見……(三五)　社會事象……(三七)　第一の方面……(三七)　社會

集團……(八八)　その研究……(八八)　第二の方面……(八九)　社會過程……(八九)　その研究……(四〇)
第三の方面……(四一)　社會形象……(四一)　その取扱……(四三)

第二篇　社會集團……四五

第一章　相互的接觸……四七

孤立と團結……(四七)　集團の第一原理……(四七)　相互的接觸……(四八)　接觸の事實……(四八)　接觸
の段階……(五〇)　接觸の成立手續……(五〇)　地理的條件……(五一)　相互的接觸の類型……(五二)　一、
集合……(五二)　二、來落……(五三)　原本的集團……(五三)　三、共同生活體（コンミュニティ）……
(五三)　基礎集團……(五四)　接觸と社會過程……(五五)

第二章　ゲマインシャフト……五六

集團の第二原理……(五六)　ゲマインシャフトの事實……(五七)　ゲマイ
ンシャフトの程度……(五八)　兩者の關係……(五九)　ゲマインシャフトの成立條件……(六〇)　種類……
……(六一)　一、種族團結……(六一)　二、生活團結……(六二)　三、共鳴團結……(六三)　ゲマインシャフ
ト的社會過程……(六三)

第三章　ゲゼルシャフト……六四

集團の第三原理……(六四)　ゲゼルシャフト……(六四)　ゲゼルシャフトの事實……(六五)　ゲゼルシャ
フトの形式……(六六)　ゲゼルシャフトの發生……(六七)　種類……(六八)　一、營利團結……(六八)　二、

享樂團結……(六九)　三、公共團結……(六九)　現實の集團……(七〇)　ゲゼルシャフト的社會過程……
(七〇)　總括……(七一)

第三篇　社會過程……七三

第一章　社會的行爲……七五

社會的生活活動……(七五)　社會的行爲……(七五)　個人的行爲と社會的行爲……(七六)　社會的行爲の
意識性……(七六)　人間行爲の原動力……(七七)　行爲の社會化條件……(七八)　社會的行爲の分類……
(七九)　一、直接的社會行爲……(八〇)　二、間接的社會行爲……(八〇)　A、對物的行爲……(八一)　B、
超越的行爲……(八二)　結論……(八二)

第二章　社會關係現象……八三

その概念……(八三)　一方的行爲と分裂現象……(八四)　社會關係現象の種類……(八五)　一、和合現象
……(八五)　二、敵對現象……(八六)　三、上下現象……(八七)　模倣……(八八)　傍觀者……(八九)　社會
的距離……(八九)

第三章　集團活動……九一

集團外の社會過程……(九一)　集團活動……(九一)　集團活動の解釋……(九二)　普通の理解……(九二)
その能動……(九三)　一、團結による制約……(九三)　二、環境による制約……(九四)　三、社會統制に

よる制約……(九七) 集團活動の種類……(九八) 一、外形的集團活動……(九八) 二、齊一的集團活動……(九七) 三、全體的集團活動……(九七)

第四篇 社會形象……九九

第一章 文化……一〇一

社會意識……(一〇一) 文化構造物……(一〇一) 文化と文物……(一〇二) 思想部類と價行部類……(一〇二) 文化生成の原理……(一〇三) 試行錯誤……(一〇四) 合理的模倣……(一〇四) 非合理的支持……(一〇五) 文化の種類……(一〇六) 社會拘束……(一〇六) 文化の變遷……(一〇八)

第二章 社會性……一一〇

社會性の概念……(一一〇) 社會性の考察……(一一一) 文化の集團的性格……(一一一) 社會性發生の由來……(一一二) 原初的決定……(一一二) 文化の相互的決定……(一一三) 支配的文化……(一一四) その制約の機構……(一一五) 社會性の檢索……(一一六) 社會性の價値……(一一七)

第三章 社會的自我意識……一一九

狹義の社會意識……(一一九) 集團の生活原理……(一一九) 社會的自我意識の性質……(一二〇) その發生……(一二一) 社會的自我の內容……(一二一) その潛在狀態と顯在狀態……(一二二) その確立の諸條件……(一二三) 分類……(一二三) 一、集團感情……(一二三) 二、輿論……(一二四) 三、社會理想……(一二五) その意識……(一二五) 社會統制と社會組織……(一二六) 社會統制の基本價値……(一二六)

第五篇 餘論……一二九

第一章 社會學の方法……一三一

社會學と方法論……(一三一) その態度……(一三一) 社會科學の獨自性……(一三二) 會得法……(一三二) 理論的法則的認識上の諸方法……(一三三) 概念構成上の諸方法……(一三三) 意志の自由……(一三四) 現象の複雜性と概括法……(一三五) 理想型化の方法……(一三六) 社會法則と豫見……(一三七) 社會法則の根本型……(一三九)

第二章 社會學史（前期）……一四二

社會學の發達……(一四〇) 社會學史の必要……(一四〇) 古代の社會研究……(一四一) 中世の研究……(一四一) 近世の研究……(一四二) サン＝シモンとコント……(一四三) コントの學說……(一四三) 社會靜學と社會動學……(一四四) スペンサー……(一四四) 力學的社會學……(一四五) 人種學的社會學と地理學的社會學……(一四五) 生物學的社會學……(一四六)

第三章 社會學史（後期）……一四八

二十世紀の社會學……(一四八) 綜合社會學……(一四九) ホブハウスとパレトー……(一四九) オワペンハイマー……(一五〇) ダルド……(一五一) デュルケム……(一五一) ギディングス……(一五二) ケン

目次

ニース、ジムメル……(一三)　文化社會學……(一四)　我國の研究……(一四)　現行社會學……(一三)

第一篇　序　說

第一章　社會問題

社會問題と社會學　社會學とは吾々の認識活動の一である社會事象に關する學問を指し、殊にそれの實在科學（サイエンス）をいふが、その發生の動機並に發達の經過は社會問題の存在によつて刺戟された。この事はコントが社會學を創始した抱負の内に、既に見ることを得る。彼は佛蘭西革命直後、第十九世紀初頭の混亂せる社會再興の熱意によつて動き、その指導原理を獲得す可く社會學の研究を思ひ立つたのである。彼は社會事象を認識し、之によつて前途を豫測し、前途を豫測して賢く對應せんことを考へ、次の如き簡單なモット（ー）を掲げたのであつた。

認識によつて豫知し、豫知によつて行動する

社會問題の刺戟　かくの如く、社會學が社會問題の存在にその端を發したのは興味あることであるが、その發達も亦社會問題に負ふこと大であつた。フランスが普佛戰爭に戰敗の苦杯を喫し、社會再建の問題に直面した時、社會學は彼地に於いて發展したのである。又、歐洲戰爭

後、ドイツが國步艱難の間に於いて、民族復興の志に燃えた時、擡頭を見たものも、社會學の研究であつたのである。植民地の狀態から獨立民族の段階に發展した米國に於いて、社會組織上幾多の問題を生じたのは當然のことであるが、之が誘因となつて、彼地に於いて社會學は未曾有の隆盛を來したのである。これ等諸事實を回顧すれば、社會學の研究が社會問題から刺戟促進せしめられたのは、寔に明かである。

社會學の立場　唯ここに考ふ可きは、社會學は社會事實或は現象に關する實在科學であつて、社會事象に關する經驗的、批判論理的性質の認識なることである。社會學は事象が如何に在るかを問ふ事實認識を專にし、事象を如何にあらしむ可きかといふ價値判斷と異る。それ故、社會學は直接吾々の實踐的行動に對し、指導原理たる可きではない。況んや、實踐的行動そのものではあり得ないのである。社會學は社會事象に對し價値判斷の態度を以て臨み、社會問題を解決す可く努める社會政策、社會事業、社會運動等の實踐諸活動と異るは勿論、社會思想といふが如き、社會改造の精神とも性質を異にする。社會學はもと純然たる社會的事實認識であつて、或る場合社會問題の研究を行ふこともあるが、その場合に於いても、之を事實的に認識するに重きを置く。價値判斷を下して問題の解決や社會改造を行はんとするものではない。社會政策、社會事業、社會運動等は、悉く社會問題解決の實踐的行動であり、社會思想はそれ等諸行動の精神的表現乃至原理をなすもの、彼等は皆社會學に對して異質的なるものである。社會問題を繞るこれ等の行動、思想に對する社會學の關係は元々か樣であるが、而もこれ等の行動、思想に對し事實認識の立場から正しい批判を與へ、彼等を善導し得るものは反つて社會學であると云へる。左にその關係を說くこととしたい。

社會問題　抑々社會問題とは如何なるものか。社會問題とは之を無制限に解するならば、吾々人間の社會生活即ち社會事象を如何に營む可きかといふ廣汎な問題である。これ恰も、個人が彼自らの生活を如何に爲す可きかといふ倫理的課題と似、吾々人間が集團狀態に於いて生活する以上、凡ゆる場所、凡ゆる時代に附き纏ふ問題であらうが、併し乍ら普通社會問題といふのは、決してその樣な際限のない問題を云ふのではない。寧ろ現代文明社會に於ける一定の社會問題に限定されて居る。産業革命以來、現代文明と呼ばれる持徵ある性格の社會構造が存し、かかる社會構造の下に於いて幾多解決を要する社會的課題が提出されたのであつて、社會

問題とはこの意味の限定された現代社會の問題を指す。そして、現代文明の性格が經濟的構造から基調を與へられて居る關係上、深刻なる問題は經濟的分野に存し、爾餘の分野に於ける問題と雖も、經濟問題と密接な關係を有することとなつて居る。

その內容　社會問題は勞働問題を中心とする賃銀問題、失業問題、貧困問題、組合問題、衞生問題、人口問題、兒童問題、婦人問題、農村問題、都市問題、敎育問題、犯罪問題等無數のものを含む。その各々が個々の社會問題であるが、それ等諸問題が現代社會の缺陷弊害に關係するは勿論である。何等かの社會的缺陷弊害存し、之を如何に處置す可きかといふ所に社會問題は在るのである。そこで社會問題とは社會的缺陷弊害の問題であるが、これ等の問題は放置し得ぬものであるから、解決に盡す所の行動や思想が次の如き方式を以て現はれて居る。

對應諸方式　社會問題は社會的缺陷弊害の問題であるが、之を解決せんと努める行動に、次の樣な三つの方式を數へることが出來る。第一は集團全體の保護救濟に訴へる仕方で、簡單に云へば、問題の解決を社會統制に委ねるものである。之は公共的行動であつて、事實上社會政策となつて居る。第二は集團內の良好な立場や惠まれた境遇にある人々が、自發的に保護救濟に當る慈善博愛の行動である。この方式は社會事業の淵源をなした許りでなく、現在に於いても社會事業の本質をなして居る。第三に、社會的缺陷弊害に直接關與し、當事者として困難する人々が奮起して行ふ、彼等自らが自らを救ふ意味の行動がある。當事者の自力更生的なこの行動こそ社會運動と見られる。

社會政策と社會事業　これ等三つの方式中、社會政策は集團の總意が發動し問題の解決を立法的に行ふ所に見られる。かくて、社會政策は國家の政治的施設として現はれる。社會事業はそれと性質を異にし、社會政策の如く公共性を持つものではない。それは徹頭徹尾私的事業たるに止る。社會政策は集團そのものの自己保存と自己發展の動機から生れる全體主義的作用であるが、社會事業はどこ迄も博愛慈善の行爲であつて、私的活動たるのみ。ただ私的活動とはいへ崇高なる利他的動機に基づくのである。階級的支配の行はれる場合など、社會政策は支配階級の恩惠的施設たる趣を呈すこともあるが、社會事業に比較すれば遙かに一般的作用であるから、制度的改革はその長所と謂はねばならぬ。之に反し、社會事業は目前の保護救濟に止る傾向を有するものであるが、その反面に於いて、個々の場合に對し卽時に有效適切な處置を講

じ得る所の、他の追從を許さない長所を持つて居る。

社會運動　社會政策と社會事業とは夫々性質を異にするが、兩者は根本的に次の如き共通點を有する。すなはち、それは缺陷弊害に直接關係する當事者から云へば、等しく外的保護救濟であるといふ點である。社會政策は集團全體の施設であり、社會事業は一部篤志家の作業であるが、かかる外的解決方式以外、當事者自らが進んで問題の處置に奮起する處に、婦人運動、農民運動等の社會運動が現はれ、その最大のものが勞働者運動たるは多言を俟たないであらう。社會運動は社會的缺陷弊害に直接關係する當事者の運動であるから、問題解決に對し最も眞劍であり、若干の倫理的價値さへ認め得べきものであつて、自力更生的に局面の打開を計る一方、缺陷弊害に對し廣く社會的注意を喚起し、社會政策、社會事業の發動を促す性質のものである。

社會思想　ここに社會政策、社會事業、社會運動等實際諸活動に精神的表現として隨伴する社會思想を擧げねばならぬ。社會思想はその內容から云へば、社會運動殊には勞働階級運動の精神的反映たることが多いが、而も社會思想は問題當事者の直接抱懷する思想でなく、當事者以外の知識階級が彼等に代つて作爲し、支持するといふのが事實である。社會思想は知識階級の作物であり、又彼等の所有物であるが、社會運動の精神的反映たると同時に、それをリードする原理でもある。同じ關係は、社會政策、社會事業に對しても亦示される。

社會政策、社會事業と社會學　思ふに、社會政策は公正なる社會的理想に照して社會的缺陷の救濟に盡す時、よく本來の使命を全うしうるであらう。この事は社會事業に就いても同樣である。社會政策、社會事業夫々の職能を思ふならば、社會運動に同情を感ずるあまり、その意義を忘れることは許さる可きでない。社會政策、社會事業が問題解決の手段として價値あることは確かである。殊に兩者は相補つて問題の解決に貢獻する夫々の長所を持つのであるから、兩者を巧に併用するを以て上策としなければならぬ。然し、社會政策にしても社會事業にしても、よく所期の目的を達するが爲には、缺陷弊害に關する精確な認識を必要とし、又單なる空想以上の改造目的の樹立と、之に達する的確な手段方法の把握が肝要である。而してこれ等の諸要求に應ずるが爲には、社會事象の研究が要求され來るであらう。如何となれば缺陷弊害も亦一種の社會事象であつて、それに關する精確なる認識は社會事象の研究に俟つことである。

又、空想ならざる目的とは卽ち實現可能の目的であつて、之は事實研究によつて事實的可能の範圍に求めなくてはならぬ。更に又、的確なる手段方法は事實を支配する原因條件に見出す以外、途はないのである。ここに於いて、社會政策、社會事業等が社會事象の實在科學たる社會學に指導を仰ぎ、社會學的研究に依據す可き關係は明瞭のことである。

社會運動と社會學　社會運動が社會問題解決上有效なる一方式たるに拘らず、危險非惡視されるは、この運動が當事者の自助的運動たる點からして自己本位に流れ易く、且又感情に驅られて過激化する短所を持つが故である。然らばかかる短所を是正し、これを正道に導くには如何なる處置を講ず可きであるか。之が爲には、問題解決に對する社會運動の役割を認識すると共に、危險性あるものに斷乎彈壓を加ふること、他方、之を善導す可く、社會的缺陷、弊害の精確なる認識と、實現可能なる目的の樹立と、的確なる手段方法の把握を敎ふるにある。從つてこの場合に於いても、社會政策、社會事業に於ける場合と原則上異るものを見ない。社會運動も亦、社會學に指導を求め、社會學的研究に依據す可きは當然の事である。

社會思想と社會學　社會運動は固より、社會政策も社會事業も社會思想をその精神的原理となし、之によつてリードされる關係にあるから、それ等實際諸行動を善導するが爲には、社會思想の啓蒙を必要とし、之によつて社會運動以下の實際諸行動の適正を期さねばならぬ。然るに、ここに於いても社會學の研究に依據す可きことに變りはない。すなはち、社會的缺陷弊害の精確な認識に努めること、空想に奔らず實現可能の公正なる目的を樹立すること、又科學的に的確な手段方法を把握することが、その要點となるのである。ここに社會思想の批判と啓蒙とに關して迄、社會學的研究の必要あるを悟るであらう。社會學は直接社會問題解決に當る諸多の活動、思想とその立場を異にする如くであるが、實際に於いては反つて彼等が健全な效果を奏するを助け、問題解決に眞に貢獻するのである。

第二章　社　會　學

その實在科學性　社會學が社會事實、現象に關する學問なるは云ふ迄もない。社會學は社會事象の研究をいふのであるが、然し社會學は社會事實或は現象のとりとめのない研究でなく、その組織的認識を指す。即ち、社會事象のサイエンス、實在科學をいふのであつて、事象の無秩序な知識の蒐集であつてはならぬ。且又、總べてサイエンスとは事實、現象を人の經驗に與へられる限りに於いて取上げ、之を批判論理的に把握する認識である關係上、得手勝手に事象を說明する非論理的說明や、或は假想的事物を論題たらしめる超經驗的取扱と異る。社會學がサイエンスたるは、それが社會事象の臆說的研究と異る點であつて、經驗的社會事實、現象に問題を限り、且批判論理的に認識する所にある。

專門諸科學　サイエンス即ち實在科學の研究は凡ゆる自然現象と人間事實に對し活潑になされて居る。その研究の全體が現代科學を構成するのであるが、之は研究便宜上若干の區劃を與へられる。大きくは、自然現象の研究たる自然科學に對し、人間事實の研究たる人事科學が對立する。或は、自然科學に對するものとして、精神科學、文化科學、社會科學等を擧げる場合もあるのである。これ等の大きな科學的區劃の內には、細かな種類として數學、天文學、生物學、經濟學等々が數へられ、それ等は又必要に應じて一層細かな諸部門に分たれる。實在科學にかかる大小諸種類の分たれるは、研究者が分野を分けて專門研究を進め、又それによつて獲得される認識を各分野に從つて保存し、利用することが望ましい所から來て居る。かくて實在科學は大小種々なる專門的研究に分れ、その結果として諸種の專門科學の存在がある。

個別科學と特殊科學　かゝにして存する所の專門科學に就いて見る時、その內には極く狹く限定された問題即ち學的對象を、餘程特殊な研究方法によつて研究して行く種類がある。これ、嚴密なる意味の個別科學であつて、例へば有機化學、國民經濟學、西洋史といふ如き種類である。それ等は研究對象を極度に分割し、それに應じて特殊の研究方法を採用して居る。然るに、この嚴密なる意味の個別科學と異り、研究對象の比較的廣い所の特殊科學も亦別に存する。化學、經濟學、史學といふ樣な種類がそれであつて、これ等の特殊科學と雖も一定の對象

を有し之を研究するに當つて特有の研究方法を持たない譯ではないが、この種の特殊科學の場合に於いては、前記の個別科學に比して研究對象が幾分か廣くなつて居り、又これに應じて少しく複雜な研究方法が採用される。それ許りではない。或る特殊科學にあつては、純然たる實在科學的認識以外、應用的研究その他の必要な考察を附帶することもある。かかる附帶的考察を伴ふに至つて、愈々嚴密なる意味の個別科學以上のものたることを示し、體系的科學と云ふ可き樣な、餘程複雜な形のものとなつて來る。

社會學の形態　社會學はこれ等何れの科學的形態に屬するであらうか。之に對して次の如くに答へたい。社會學は嚴密なる意味の個別科學ではなく、寧しろここに云ふ意味での特殊科學の一種をなし、而も一個の特殊科學として、體系的科學と考ふ可き樣な廣義に於ける科學である。この點、社會學は恰も現行經濟學の如き科學形態をなすといへる。ゾムバルトが現代經濟學を以て「經濟總體學」或は「全體としての經濟の科學」と見た樣に、社會學は社會總體學或は全體としての社會の科學と認む可きである。社會學は實に、この意味の社會的科學をなして居る。

社會總體學か嚴密な個別科學か　社會學が社會總體學と稱し得る性質の體系的科學なるは、要するに、斯學が嚴密なる意味の個別科學以上のものなることによるが、この事實は反つて一部の學者をして、社會學を人事諸科學の全體を意味する總合學であるとか、或は人事諸科學の結論を掲げる綜合學であるとかいふ誤解に陷らしめた。之は社會學に關し確かに起り得る所の誤解であるが、社會學は人間現象中特に社會的な事實現象を題材として研究する許りであつて、人間現象中それとは別個の分野を研究する經濟學、政治學、宗教史等々、人事諸科學の總稱でもなく、又これ等諸科學の結論を漫然と綜合するものでもない。社會學は人事諸科學の總合學でもなく、又その綜合學でもない。唯、人間現象の社會的分野の研究と見做す可きのみ。然るに、社會學が總合的或は綜合的何れの形態でもないことは、逆に一部の者をして、社會學を嚴密なる意味の個別科學と思惟せしめる誤謬に導いた。すなはち、輓近の研究者の內には、社會學を社會集團の學であるとか、或は社會過程の學であるとか、或は社會形象の學であるとか解し、その研究を部分的社會事實、現象に局限し、之によつて形式社會學、社會關係學或は文化社會學等、個別諸科學を構想する者がある。併し乍らその根本的誤謬は、社會事象の各一方面だけを認識すれば足りると思惟し、それ等の諸方面が總體的に研究されて始めて、認識的要望の滿足されるを忘れた點にあるのであつた。

社會學の定義　社會學は人間現象中、社會事象に關する實在科學であるが、社會事象とは人

間間の關係事象であり、人間間の關係事象は社會集團、社會過程及び社會形象等の諸方面に分れるのであるから、社會學は次の樣に定義されやう。

社會學は社會集團、社會過程及び社會形象等、人間間の關係事象の實在科學である。

縱の諸部門　社會學に對象となる社會事象が社會集團、社會過程及び社會形象の諸方面に分れることから社會學は

Ⅰ　社會集團論

Ⅱ　社會過程論

Ⅲ　社會形象論

等、三つの研究部門を持つ。すなはち、先づ社會集團論に於いて人々の形成する團結或は團體の事實を研究し、次で社會過程論に於いて人々の營む社會的生活現象を考察し、最後に社會形象論に於いて人々の間に生成存立する慣行、制度、思想といふが如き文化構造物を攻究するのである。これ等三つの部門が、社會學の縱の諸部門を作る。

然るに右の何れの部門の研究に於いても研究は根本的に二つの對立的な仕方によつて行はれる。一方に於いて問題を抽象的に考察すると同時に、他方に於いて之を具體的に攻究するのであつて、これ迄心理學的社會學、形式社會學、現象學的社會學等と呼ばれた研究は、大體抽象的研究に傾き、之に對し、具體的研究を主としたものはデュルケム派の社會學、會得的社會學（マクス・ウェーバー）、社會調査等々であつた。抽象的研究と具體的研究とは互に方針を異にするが、然し、兩者の間には密接な關係が存する。吾々が抽象的研究を行ふ場合には、純粹理論を樹立する許りでなく具體的事象に下降して純粹理論を適用、演繹することを行ひ、同時に實際に照して理論の當否の驗證を試みる。ここに、抽象的研究から具體的研究への連絡が認められる。又、具體的方面から研究に立入る場合に於いても、事實に對し現實的說明を與ふる許りでなく、進んで抽象的事象に迄上昇して純粹理論を歸納する樣になり、之によつて抽象的研究への移行が認められる。

純粹社會學と現實社會學　人間間の關係事象は本質的に吾々人間の意識現象であるが、同時にそれが自然界內部の現象であること、又それが複雜なる歷史的姿態を採るを忘れてはならぬ。それ故、社會事象の具體的研究とは、之を自然界と歷史性との關聯の下に攻究することで

あつて、具體的研究から抽象的研究へ進むといふは、社會學的認識に對し必ずしも重要でない自然的要素や歷史的姿態を捨象しつつ、最も純粹な社會事象を把握しやうとする仕方である。之に反し、抽象的研究から具體的研究へ向ふといふは、最も純粹な事象の考察から出發し、それが自然的要素と結びつき、或は歷史的姿態を採つて存する有樣を認識せんとするものである。

かくて、抽象的研究は純粹社會學をなし、具體的研究は現實社會學をなすものである。社會學を概說する場合に於いては、一般問題の要約的說明を試みる關係上、純粹社會學の理論を叙述するだけの事とならう。現實社會學は過去に屬する事象の研究であるか、或は眼前の現實事象を攻究するかによつて、その內容が社會史即ち歷史的社會學と社會調査即ち社會誌學とに分れる。結果として、これ等二つの新部門が前記三部門を橫斷して次の如くに成立つ。

1　純粹社會學即ち抽象的研究

2　現實社會學即ち具體的研究

A　社會史即ち歷史的社會學

B　社會調査即ち社會誌學

實踐社會學　純粹社會學及び現實社會學の二部門は橫の部門として前記縱の三部門に交叉する。そして、これ等諸部門は皆社會學の中心研究となるのであるが、この外社會學に於いては、次の如き附帶的諸研究が數へられる。總べての實在科學に於いて然るが樣に、社會學に於いても、說明、理論は吾々の實踐活動に指針を與へ得るのであるから、この方面の應用研究たる實踐社會學の研究が現はれる。實踐社會學は社會事象を如何なる理想或は目的に近づく可きかといふ社會的理想或は目的の把握と、かかる理想或は目的實現の爲に如何なる手段、方法を選ぶ可きかといふ社會的手段、方法の論定を含まなければならぬ。ここに、その內容が社會目的論と社會技術論に分れる理由がある。社會目的論は社會事象の研究に基づき實現不可能なる空想を棄て、最も確實に實現し得る理想或は目的を顯現する。又、社會技術論は社會學的說明理論に從ひ、社會的理想或は目的を結果として導き出す可き原因或は條件を探索するのである。

社會學史と社會科學の論理學及方法論　總べての人事科學に於いて、先行者の行つた研究、理論を參考にすることは、過を再びせず、研究の重複を避け、研究を順調に進捗せしむる所以で

あるから、先行學說の批判檢討といふことが有意義となる。社會學の場合に於いても、この意味から學說史の研究がなければならぬ。社會學史の部門が、これが爲にあるのである。社會學史の研究は純然たる社會學理論の研究たる社會學說史と、社會思想の研究たる社會思想史とに分れる。最後に、社會科學の概念構成と研究方法の考察が、今日社會學上大いに問題となる關係上、この方面の研究が最も附帶的なる一部門となるであらう。かくて、社會學の附帶的諸部門は次の如くに表示される。

1　實踐社會學卽ち應用研究
　a　社會目的論
　b　社會技術論
2　社會學史
　a　社會學說史
　b　社會思想史
3　社會科學の概念構成と研究方法の考察

第三章　社會事象

社會或は社會生活　社會學に對象たる社會事象は社會事實乃至社會現象の謂であるが、普通之を社會或は社會生活と謂つて居る。然るに社會或は社會生活とは、大體次の諸方面の事實、現象に分れて居る。

一、最も廣範圍の人間事象
　例へば、學校を了へて社會へ出るといふが如し
二、相當廣範圍の人間事象
　例へば國家及び社會といふが如し
三、限定範圍の人間事象
　例へば上流社會といふが如し

かくして社會或は社會生活の持つ共通の意味は、人間生活の事實或は現象を指すに外なら

ぬ。從つてそれだけでは、事象と區別し難い樣であるが、注意す可きは、人間事象の內、個人的生活現象以上の複數人の生活事實が社會事象たることである。二人以上の人々が、互に關係交渉を持つに至つて、社會事象が現はれるのであるから、社會事象を以て廣く人間關係事象と理解しなければならぬ。

社會の發見　人は常にこの意味の社會事象を營む者であるから、社會事象は人類の生存と共に古いと謂はねばならぬ。然し西洋に於いてさへ、社會が問題とされたのは決して古來からではなかつた。それは比較的最近の事柄であり、主としてフランス革命以後、第十九世紀初頭以來のことであつた。フランス革命は政治革命として、國家組織に數度の變更を加へたのであるが、國家組織に關係少い方面の事實は、革命後と雖も舊態を其儘に保存した。ここに人は、國家以外別個の生活分野の存することに目醒め、この方面の事象に對し社會の名を與へることとなつた。サン＝シモン、ヘーゲル等が、新に發見された社會に就いて論じたことは、今日、興味を以て回顧される事柄であるが、サン＝シモンは國家の基礎として之を考察し、ヘーゲルは社會にして合理化されるならば結局は國家に還元されると見たのである。彼等の觀察は互に異つたが、兩者の根本に於いて一致した所は、吾吾が今日民族と呼ぶ特定現象を社會と考へたことであつた。

社會事象　今日と雖も、社會と云へば國家以外の現象を指すことが行はれて居る。先に擧げた「國家及び社會」といふ社會の意味はその例をなす。然し、かかる社會の限定概念は任意的解釋に過ぎず、事實に基くものではない。之は國家以外の人間關係事象を社會と云つただけの事であるから、廣狹種々なる社會事象の觀念が生じ得る。一方に於いて、人間間の關係事象の一切を含む最も廣範圍の現象がそれと見做され、「學校を了へて社會へ出る」といふ使用法が成立ち、他方に於いて、限定範圍の現象をも社會事象と名づけ、「上流社會」といふ理解も出來上つた。何れの場合に於いても、事象の本質は人間間の關係にあるのであるから、之を一層一般的に觀念しなければならぬ。そして、この意味での社會事象は人間現象中の一大事象であるから、之を專門的に攻究する特殊科學として社會學を生ずるに至つたのである。

第一の方面　社會事象を問題とする時、之を單に社會と云ふ樣に、それの特定一方面の事實が擧げられる。例へば「國家及び社會」といへば、國民各自の形成する團結、卽ち民族團體を

指す。民族以外の例に於いても、事柄は同樣であらう。社會事象は人間間の關係事象であるが、先づ最初に人々の作る團結、團體が注目を惹くのである。蓋し、凡ゆる社會事象は人間團結であるか、然らずとするも、人間團結と密接なる關係に立つ故である。吾々は人間團結を社會事象中重要なる一事象と見做し、社會學最初の一課題と考へねばならぬ。

社會集團　如上の人間團結を社會集團と呼ばうと思ふ。社會集團の具體的種類は枚擧に遑ないのであるが、それば抑々、如何なる事實であらうか。社會集團が複數人の團結、結合なるは云ふ迄もないが、それが人間間の物理的結合でないのは特に注意を要する。人々が物理的に結合するは握手、抱擁、姙娠その他に於いて見る事實であるが、之は毫も人間團結ではない。人間團結たる集團は複數人間の特別なる關係であつて、一言にして云ふなら彼等が互に關係交渉を行ふ狀態、或は彼等が關係交渉し得る狀態にあることを指す。別の表現を以てすれば、人々互に作用反作用の生活を行ふ用意を整へる狀態であつて、人々互に社會活動をなし得る關係に名づけてしか謂ふのである。

その研究　民族、國家、階級、都會、又家族、組合、學校等、總べてはこの意味から社會集團をなし、又かかる狀態は皆悉く社會集團をなすのである。社會集團は人間社會活動の舞臺であつて、集團はその範圍に於いて社會活動を生起する地盤となる。そこで、社會活動の內から何等かの所產が現はれるとすれば、その所產も亦社會集團を舞臺、地盤たらしめるものであらねばならぬ。この意味からして、集團事實は社會事象中最初の課題として攻究を要するものであり、之を吾々は社會集團論に於いて取扱ふのである。

第二の方面　社會集團は社會學最初の課題となるが、社會事象は別の觀點からすれば社會生活と見做され、その運動的方面が注目される。社會集團は一種の靜態的事實と考へられるが、かかる靜態的事實以外、動態的社會現象の存在が認められる。既に述べた樣に、社會集團と雖も動態的社會活動の舞臺或は地盤として意味を持ち、多くの人々が社會を云はずして社會生活を說くのは無意義の事ではない。吾々はこの社會生活を社會活動の現象とし、社會過程と稱するのであるが、社會過程が社會事象中に有する所の意義は著しく大であり、之は社會事象の研究上、社會集團に次ぐ第二の課題をなすとしなければならぬ。

社會過程　然らば、社會過程とは如何なる現象であらうか。社會過程が個人現象たらざる

は、既にそれが社會事象に屬すことによつて明瞭である。社會過程は最少二人以上の複數人の關係活動であるを云へば、その性質は大いに明瞭となる。然し複數人の關係活動であると云つても、それが物理運動に止まり、或は生物作用に終るならば、社會過程とは見做し得ない。ここに特別な限定が存するのである。その要點は人々互に意識的に卽ち心的に關係交渉するといふこと之である。意識的卽ち心的關係活動たる限りに於いて、社會過程は成立つ。之をジムメルが心的相互作用と解したのは、寔に適當であつた。社會過程に關する限り、心的相互作用觀が適當し、この標準の下に社會事象の動態的方面が、社會過程として把握されるのである。

その研究　社會集團は定義的に社會過程の生ずる舞臺であり、地盤である。民族、都會等に於いて多種多樣の社會過程の展開するは、その實例である。社會階級、家族に於いて、又國家、組合、學校に於いて、夫々特有の社會過程の行はれるは、又他の例である。社會過程の營まれる所、既存集團の解體作用が行はれ、同時に新規集團の形成作用も行はれる。そして、その間最も重要なるは、幾多の文化構造物の結晶し來ることである。かかる文化構造物は次に問題とする社會形象であるが、社會過程はそれ自體として重要な社會事象であるのみならず、爾餘の社會事象への關係性に從つて、社會學の中心問題たるは明かである。之を吾々が社會過程論に於いて取扱ふは、必然的な事である。

第三の方面　社會事象として先づ社會集團を取出し、次に社會過程を擧げたのであるが、これ等の事實、現象を以て、社會事象の總てが終ると見るを得ない。すなはち社會構造の事實がなほ殘留するからである。通俗の見方を以てしても、人間團結と社會活動を社會的事實と認める許りでなく、それ以外、社會構造或は社會意識を特別問題として考へる。「個人と社會」と云ふ時など、社會の意味は集團でもなく社會過程でもないのであつて、寧しろ個々人から離れ、個々人に對立する社會構造、或は社會意識をいふのである。社會構造、社會意識とは、社會生活の舞臺、地盤たる集團ではない。又この舞臺、地盤を俟つて實現される生活活動でもない。それは反つて社會的生活活動を支配する慣行、制度、思想の類を云ふのであつて、それ等は廣く社會形象と名づけ得る。社會形象の事實は、社會事象の第三方面に當るのであつて、社會學の窮極的課題たる性質を持つて居る。

社會形象　吾々はこの第三課題を社會形象論に於いて攻究する。社會構造、社會意識を云ふ

所の社會形象は、爾餘の社會事象に對する支配性に從つて、卽ち社會過程や社會集團を感化、影響する作用に從つて、先づ社會的と見做されるであらう。民族的慣行、都會の雰圍氣、階級意識、家族精神、國家的理想、組合規約等を採ればそれ等のものが各々の集團內部の社會過程を支配、影響するは一見明瞭であらう。然るに社會形象は、他の社會諸事象に對して支配、影響を與へるよりも、それが社會過程の內に生成凝結する文化的構造物として、それ自體の內に人間間の關係性を本質的に持つて居る。社會形象は社會過程の內にそれの凝結物として生成、存立する特殊の社會事實である。ヘーゲル以來、社會を文化的構造物と見做した意義は、この點に存する。

その取扱　社會學的第三課題は、この社會形象である。社會集團の存する處、社會過程が展開し、社會過程の展開する處、その凝結物として社會形象が生成し來る。之が社會構造、社會意識と呼ばれることはさきにも述べた所であるが、かかる社會形象にして存立すれば、社會過程はその感化、影響の下に行はれ、延て社會集團も亦その支配を被らずには居らない。社會形象が爾餘の社會諸事象に對して行ふ役割はしかく重要であるから、吾々は社會形象の研究から總ての社會事象を見通す立場を與へられる。この事は社會形象研究の重要性を示唆して充分であり、その攻究の有意義なるは絮說を要しない。

第二篇 社會集團

第一章　相互的接觸

孤立と團結　人は孤立して他人と關係交渉することのない狀態に於いて生活するを得ない。孤立が絕對にないと斷言し得ないが、然し個々孤立の生ずることありとしても、孤立狀態に於いて人はよく生存競爭に堪え、生物として果又精神生活者として滿足なる生活を行ふこと困難な關係から、永きに亘り孤立狀態を守り得る者でない。高々、一定の期間一時的に孤立し、他人との間の複雜な關係交渉を隱居、離緣、絕交、脫退などの形に於いて單純化し得るに過ぎない。人が絕對的意味に於いては孤立し得ぬことは、之を反面から云へば、常に他人と團結狀態にあることを意味する。そしてその結果として、人間團結卽ち社會集團があるのである。

集團の第一原理　人間團結を意味する社會集團は如何樣に存在するか。この問題は、次の如く答へられるであらう。人間團結卽ち社會集團は、最少二人以上の人々が互に關係交渉を行ひうる狀態をいふものであるから、それには人々の間に先づ交通可能性が存しなければならぬ。

例へば同一場所や交通機關が人々を結びつける關係之であつて、同じ場所の人々或は交通機關を有する人々は相互に關係交渉に立入る可能性を具へ、社會集團の基礎的構成原理がこれに見られる。この原理は、如何なる人間團結と雖も之を缺くことが出來ない。若しこの基礎的原理を缺くならば、他に如何なる團結が彼等の間に成立つとしても、關係交渉は不能となつて了ふであらう。

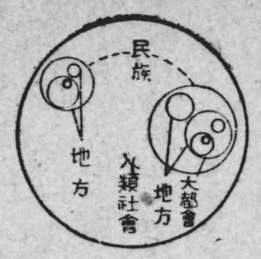
相互的接觸　然るに、多くの學者はこの團結原理を等閑に附する傾があつた。それは彼等が社會集團の實際の事實を見ず、只管その觀念の分析を企てたからであつた。吾々は然し、社會集團の意義を科學的に明瞭にし、それによつて基礎的原理として人々の間の交通可能性を重視し、之を相互的接觸と概念する。過去に於いても社會集團の實際の事實を研究した者は、群集、地域團體等、人々の直接的接觸形態に注目し、又敏感なる者は通信機關、運輸機關の進歩による間接的接觸形態たる社會圈乃至公衆等の存在をも指摘したのである。ただ從來に於いては、これ等の團結が相互的接觸を原理たらしむる點よりも、他の團結原理を伴ふ點を說く者多く、相互的接觸といふ基礎的原理は正面から取上げられずに居つたのである。

接觸の事實　人々の關係交渉を行ふ舞臺たる社會集團に、相互的接觸の原理を缺くことは出來ない。相互的接觸は、根源的には、吾々の感官即ち五官を通すと云へる。吾々の五官、就中視覺と聽覺とが根源的感覺能力を提供し、五官を以て觸知し得る範圍内に、最も高度の交通可能性が與へられるのである。然し五官の中最も有力なる視覺、聽覺も、普通には遠距離に達し難く、その感覺範圍に限りがあるのであるが、文明の進歩と共に交通機關の進歩と、進歩した交通機關の設備が增加し、根源的な五官の接觸は交通機關を通す交通的接觸によつて補はれることとなる。交通機關による進歩した相互的接觸と雖も、實は根源的な五官による接觸と別のものではなく、唯それが交通機關の媒介によつて行はれるだけであるが、今日に於いては後の

第一章　相互的接觸

方の間接的な交通的接觸が人間間の接觸を支配することとなつた。交通機關の發達によつて吾々の接觸範圍は著しく擴大され、現に吾々は文明的機關を通し、吾々の觸手を全世界に延す域に到達した。全世界が一大集團を形成するに至つたと、この意味からして云ふことが出來る。國際的人類社會の如き、この關係からは、既に實現されて居るのである。

接觸の段階　但し、人間間の相互的接觸には段階の差が認められる。例へば全世界の國際的人類社會は今日その程度から云つて未だ極めて稀薄である。これ、交通機關の全面的設備が未だ不充分の故である。それに比較し、特定民族内の接觸は餘程密接で、



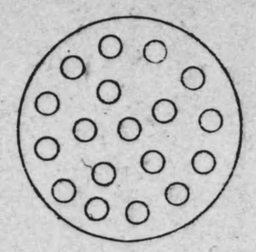
あり、その内部の一地方、一都會に至つて接觸は益々濃厚となる。かくして、相互に何等の交通機關を媒介とせぬ直接的感官的接觸狀態即ち集合狀態に至つて、それは極度の密接さに到達する。隣保、家庭の如き集團はその例である。かくの如く相互的接觸には段階的に重複する多くの範圍があり、實際に於いてはそれ等の範圍が折れ重なつて居る。

接觸の成立手續　相互的接觸の成立に二つの場合の存するを見るであらう。一は偶然の場合であつて、人々それを欲せざるに接觸起ることである。例へば買物のため下町に赴き雜踏する群集中へ入り込むとか、或は郊外の農民が都會の交通機關の發展により、居乍らにして都會の生活圈に抱擁されるが如し。之に反し、第二の場合は、社交的會合に見る樣に、計畫的に作爲されるもの。集合、會議、宴席等皆その例であるが、かかる感官的接觸形態許りでなく、交通機關による間接的接觸形態も亦計畫的に作爲される。近代的交通機關の發達を以てしても、電話の架設、ラジオ受信器の設備なくして、吾々は相互に接觸し得る者ではないから、間接的接觸圈に參加せんがためには、勢ひ計畫的詐僞的態度に出でねばならぬ。要するに、人々相互の接觸が偶然に成立つ場合と、計畫的になされる場合とがある。この二つの場合以外、强ゐて數へれば、强制的に接觸の實現される場合がある。例へば刑務所、隔離病舍の如きその例となる。然し、この强制的な場合は、外部の者の計畫によつて當事者が接觸狀態に置かれるものであるから、之は第一、第二の混合形態と見做してよからう。

地理的條件　相互的接觸の團結形態たる所の部落、地方、國家等は、その成立の地理的環境に左右される點を、古來重視された。これ、自然環境が根本的に人間棲息地域を限定し、又交通機關の設備に對して障碍

となり、之によつて相互的接觸に制限を加へる事實あるによる。これ等の制限は皆事實であるが、同時にそれが絶對的でないことは、宜しく注意す可き點である。

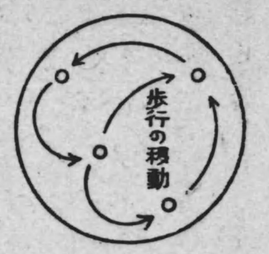
相互的接觸の類型　人間間の相互的接觸は次の如き類型に分たれ、その類型は又同時に、社會集團の分類となつて來る。



一、集合　之は直接的感官的接觸形態、つまり人々の面接的接觸の團結である。群集、人だかり、集會、會議と稱する各種の團結はその例である。集合形態には永續性の認められぬのがその特徴であり、彼等は時間的に存在を限定されて居る。これ、人人の生活諸要求がこの小さな集合狀態を以てしては滿足されぬことから來る。

群集を以て一時的存在の集團とした群集研究家の觀察は誤ではなかつた。人間は原始時代、遊牧群團を作つて生活したと稱するが、之は全體的に移動し、生活諸要求に應じ得た故である。現代に於いても隊商、旅行團等は、同じ理由から、相當期間、集合狀態を繼續する實例を供する。

二、聚落　これは人間の日常簡單なる移動による接觸を支配せしめるものである。ここに



日常簡單なる移動と云ふは、手輕な歩行的移動をいふ。聚落は部落、村落等の小地域團體に例を見る。都會は既にその性質を異にするが、都會に於いても內部の界隈、町內等は皆一種の聚落と見なければならぬ。聚落にあつては人間生活上の諸要求は充分滿足され、集合に見られた時間的制限は取除かれ、聚落には之が爲め永續性が出て來る。又、人の歩行的移動は交通機關の未だ發達なき原始段階に大なる意義を持つのであるから、聚落形態は古代に於ける重要なる團結事實であつた

原本的集團　凡ゆる人間生活に於いて、集合及び聚落は原初的集團形態と見ることが出來る。交通機關の未だ發達せざる原始段階にあつて、又交通機關の發達を見た文明時代に於いても、之を使用すること少い幼少年者にあつて、この種類の團結は主要な生活場面をなすのである。この意味から、一部の社會學者が集合、聚落を以て原本的集團と見たのは正しい見方であつた。

三、共同生活體（コンミュニテイ）　相互的接觸には、集合、聚落以外、交通機關による間接

的接觸の支配するものあり、之を共同生活體と呼ぶ。都會殊に大都會、地方、國といふが如き、皆それである。これ等諸團結は文明的な生活圏乃至交通圏である。東洋、西洋と名づくる社會範圍も、廣大な共同生活體の例と見られる。今日、全世界の人類も亦全體として窮極的な一大共同生活體をなすと見てよい。接觸程度に於いて、

それがなほ稀薄なるは爭ひ得ないが、この稀薄な團結狀態も將來に於いては、交通機關の進歩增設によつて、次第にその團結程度を增加するを豫想される。

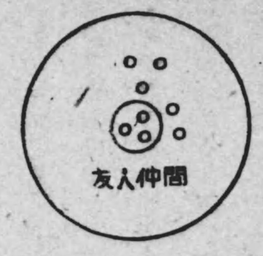
基礎集團　共同生活體を主題として研究に當つた社會學者は多い。マッキーヴァーの如きは代表的學者であつた。彼は共同生活體を基礎集團と解し、凡ゆる爾餘の團結はその內部に包括されるとした。共同生活體は相互的接觸の一形態であつて、之に基礎性を認める眞の理由は、相互的接觸が社會集團の第一原理たる故であつた。現代に於ける最も包括的な相互的接觸は共同生活體の形態に見られ、凡ゆる爾餘の團結と總べての社會事象はこの範圍內に存立展開するのであるから、社會學的研究は卽ち又共同生活體の研究であると云ふも過言でない。

接觸と社會過程　屢々、單なる相互的接觸の狀態に社會諸活動は可能であるかといふ疑問を生じ、この狀態だけで社會集團は未だ成立せぬとの誤解がある。然しこの疑問は理由に乏しい。事實上、單なる相互的接觸狀態に於いても、人々の社會活動は可能のことである。この狀態にあつて人人互に相手に對し無關心たり得るならば、社會活動は何等成立ち得ない筈であるが、人は普通この狀態に於いて相手に對して關心を寄せ、その結果三種の特色ある社會過程の種類に接する。一は當事者が不可避的に他人に影響を及ぼす社會的作用であり、二は相手の如何なる者であるかを探求する意味の試驗的社交活動であり、三は本能的又意圖的敵對態度による爭鬪現象である。これ等の現象は誤つて集團外的現象と考へられるが、事實は決してさうではない。不可避的社會作用も試驗的社交活動も又多數の爭鬪現象も、皆悉く相互的接觸を前提として發生する。而も實際の社會集團に於いて、接觸の原理は常に根抵に横る關係が存するから、如上の現象は常に繰り返して出現するのである。又相互的接觸の密度如何によつて集團內に展開する社會過程は或は促進或は澁滯せしめられ、直接的接觸に於いて充分な社會生活が行はれるに反し、間接的接觸に至つてそれが弛緩するといふ結果を見るのである。

第二章　ゲマインシャフト

集團の第二原理　社會集團のあるものは、人々の相互的接觸によつてのみ存する。例へば無秩序の群集、初期の植民地部落の如し。現在、世界全體の形成する國際的人類社會も、その例とするを得やう。然し多數の實例に就いて云ふ時、集團は相互的接觸といふ原理以外それ以上の團結關係を附け加へて存在して居る。同一場所に集る人々が實際上に於いては友人として融和團結し、同一都會に住む人々、生産者消費者たる點からして協同團結するが如し　初期の植民地部落の如きも歳月の經過につれ、住民の間に自然、感情的融和が生じ、又利害關係から意志的協同の事實も現はれる。そこで、社會集團には相互的接觸以上の原理を擧げる必要を見る。この意味を以て最初に擧ぐ可きは、人々互に同情或は愛情を抱き合ふ關係であつて、かくの如き感情的融和によつて特別なる關係交渉の範圍が劃され、特有なる團結が認められる。同一場所に集合する人々の内に於いても友人仲間は特別なる集團狀態を示す如き、その例である。

相互的接觸の範圍

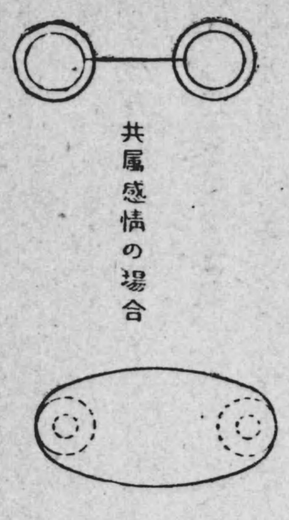


ゲマインシャフト　人間間の團結が同情或は愛情の感情から成立つ時、この團結狀態をゲマインシャフトと呼ぶ。これは感情的融和の團結である。かかる集團原理に關しては、學者は早くから注意を拂つて居つた。すなはち同一の血緣、人種或は同一の職業、地位、傾向の者が感情的に相融和し、又廣く人類全體が同種類の生物たる點からして和合する事實を注意したのである。これを理論化したものはアダム・スミス以來の社會同情說と呼ばれるものであつた。家族、民族、階級、職業團體、倶樂部、友人仲間の存在は、事實上、社會同情說を以て解釋するを當れりとする。集團の團結原理としては、それであるから、感情的融和の事實を閑却してはならぬ。さきに吾々は、相互的接觸を以て社會集團の第一原理としたのであるが、新に、接觸狀態にある人々が同情、愛情を抱き合ふ所の關係を、その第二の原理とせねばならぬ。テンニースはかかる感情的融和の團結に說明を與へ、之をゲマインシャフトと呼んだ關係上、吾々も亦その名稱を踏襲する。

ゲマインシャフトの事實　ゲマインシャフトが相互的接觸の人々の間に發生するは、下に述べる通りであるが、その性質は次の如くである。接觸圈内の人々が互に相手を選擇し、相手に對して同情、愛情の感情を持つのがこの團結の特徵であるが、然し相手を選擇すると云つても、

當事者は理性的意志によつてそれをなすのでなく、寧しろ一切の意志を超越した非理性的な感情の發動によつて相手が決せられ、相手の選擇は自發的に行はれるのである。意志を超越する點、ゲマインシャフトは自然發生的といへる。人は相手に對し故意に同情、愛情を持ち得る者では無い。之は全く意志以外の作用である。この點に於いて、ゲマインシャフトも亦相互的接觸の關係に似た客觀的性質を具へる。ただ相互的接觸が吾々の意識に拘りのない外部的關係たるに比し、ゲマインシャフトは感情狀態に由來するのであるから、なほ心的團結といふことが出來る。心的意識的團結であるが、理性的意志の團結でなく、非理性的感情的團結なるがその特徵である。

ゲマインシャフトの程度　人々相互に感情的に同情愛情を抱くことから、ゲマインシャフトは成立つ。然るに、この團結には深い程度と淺い程度とが區別される。家族の人々に於いてそれは頗る深刻であるが、同業者の間に於いては、多くその樣に深刻なり能はぬ。或る場合、團結關係なきが如く程度の輕微なことさへ珍しくない。然し孰れの場合にあつても、ゲマインシャフト狀態の人々は同情、愛情を抱き合ひ、かかる感情は結局互に相牽き合ふ感情であるから、共屬感情と名づけられる。共屬感情を抱く人々がゲマインシャフトを形成するのである。共屬感情は最初の段階にては自己は自己なりとの意識即ち自我意識を棄てて居らぬ。自我意識をその儘となし他人と相牽く感情たるに過ぎないが、一度感性が亢進すれば、自己は自己なりとする自我意識を解消し、或は解消しない迄も之を後退せしめ、意識の前面には自他一體なりとの意識即ち吾等意識を生ずる。この狀態はゲマインシャフトの最も深刻の段階であつて、その感情狀態に名づけて一體感と稱する。例へば普通の友人間の感情は單なる共屬感情に止るが母子間の感情は一體感たることが多い。



兩者の關係　ここに附言す可きはゲマインシャフトを實現する人々が最初に共屬感情を抱き之が深められ

行つて一體感に至るといふやうに、共屬感情と一體感との間に繼起關係の必然的でないことである。それとは逆に、人々最初は一體感によつて深刻なゲマインシャフトを作るも、その後、かかる感情が稀薄となり、共屬感情の形の下に殘留する例も少くない。母子關係にあつても、子供の側の獨立性の發達と共に、最初支配であつた一體感が共屬感情に退化するなどは、その適例である。

ゲマインシャフトの成立條件　ゲマインシャフトは如何なる條件を俟つて生ずるか。發生の根本條件が人々豫じめ接觸狀態にある可きことは疑ひを容れぬ。人は全然未知の他人に同情、愛情を抱き得ないからである　然し接觸は必要なる前提條件たるのみ、決定條件と考へることを得ぬ。相接觸する場合に於いても、人々の間に常に同情、愛情が生ずるとは限らぬからである。ゲマインシャフトの生ずる決定條件は、第一、人々相互の性質上の類似であり、第二に彼等の間の利害の一致である。同類相親和し、同病相憐れむ事實は前半の例となり、同一地位、身分の者が社會階級を作り、同一趣味者が同好團體を爲すも亦然りである。ギディングスは有名なる同類意識說によつて、よくこの條件を指摘した。彼は社會集團の總てが性質上類似する人々から形成されると說いたのであるが、性質上の類似から成立つはゲマインシャフト團結を主とする。唯考ふ可きは性質上類似する同類は彼等の間に欲望の共一があり、利害の衝突をも來し易く、互に反撥すること少からざる點である。從つて、この條件には「利害の衝突なき限り」の限定を附するを要する。利害の衝突なき限り、性質上類似する同類がゲマインシャフトをなすと云はねばならぬ。然るに、他方、人々積極的に利害の一致を見る時に於いても、又同じ樣にゲマインシャフトが生ずる。永年圓滑に取引を行ふ商人と顧客との間に、感情的融和の醸成されるをその例としやう。相連添ふ夫婦の間に愛情の次第に濃やかになつて行くのも、この第二の條件から說明される事實である。かくて、性質上類似する同類がゲマインシャフトを作るといふ事實も、實は彼等の間に生物的社會的利害の一致の伏在するが故であつて、この事あるによつて、同類融和の傾向が人間性に植ゑつけられたと見る可きものである。

種類　ゲマインシャフトは深淺の程度による共屬感情の類型と一體感の類型とに分たれ、又個々の性質、體驗に關係して出來上がるゲマインシャフトと、全人格に關係するゲマインシャフトとを區別し得る。然るに、人の先天的生物的性質の類似或は利害の一致よりするゲマインシャフトは、後天的社會的性質の類似や利害の一致からするゲマインシャフトに對し、深さの程度に於いても、又關係する人格の廣狹に於いて

も對立的である關係上、それに從つてゲマインシャフトの種類を分つことが出來る。

一、種族團結　之は人々の先天的生物的要素に基いて成るゲマインシャフトである。同一血族の團結、又性的團結等その例となる。母子の團結、戀愛關係、夫婦結合等から人種的、同祖的團結等皆これに屬す。種族團結として特に重要なるは家族、氏族、部族、民族等の團結であつて、これ等の血族團體が原始時代に於いて、又歷史的時代に於いて、大なる社會的役割を演じたのは著しい。凡ゆる種族團結が永續性に於いて優れるは勿論である。

二、生活團結　人々の後天的社會的要素に基づくゲマインシャフトの種類を生活團結と共鳴團結とに分つ。これ、後天的社會的要素が外部的方面に存すると共に內面的方面にもあるからである。外面的な後天的社會的要素に基くゲマインシャフトが生活團結であつて、同一の運命、境遇から生ずる親和團體はその例であるが、所謂地緣團體の如きもこの種の團結たることが多い。生活團結の適例となるは社會階級と職業團體とである。階級は同一地位、身分の者の團結であり、職業を基礎として存する。人々の後天的社會的要素は變動し易いのであるから、之に基づく生活團結は永續性に乏しい。

三、共鳴團結　後天的であるが內面的精神的諸要素に基づくゲマインシャフトが之である。趣味、嗜好、政見、信仰、敎養、思想を等しくする者の間に、この種の團結が生ずる。そこで具體的には趣味團體、同好團體、宗敎團體、藝術團體、政黨政派等その例となつて來る。敎養ある人々相倚つて成る知識階級、思想上の友からの思想團體の如き、注目す可き個々の例であらう。

ゲマインシャフト的社會過程　ゲマインシャフトの人々は感情上に於いて融和一致して居るのであるから、この團結範圍に生ずる社會活動が打算の點なく、打解けて行はれるは當然の事である。人は好意を以て相手に接し、相手も亦善意を盡して之を受け入れる。好意と善意とによつて彼等の間の總べての問題が處理され、社會過程は從つて親和的である。友人間に於いては、商取引と雖も經濟的利益を度外視するが如き、それである。又人々の共屬感情が程度を深め、先に述べた自他一體といふ一體感に達するならば、社會過程は親和の極致として犧牲的特色を發揮して行く。この場合に於いても母子の生活が明らかな證據となる。又一體感の段階にあつては、總べての活動が當事者個々の個人的立場を離れ、自體一體たる全體の立場のものとなるのであつて、之は形式上、後に述べる集團活動となる關係を見るのである。

第三章　ゲゼルシャフト

集團の第三原理　人々の間に交通可能性存することによつて社會集團が在るなら、それは相互的接觸といふ第一原理だけの問題である。然し、團結は通常この單純な狀態に止ることなく、それ以上の構成原理を加へる。接觸する人々互に感情的に結びつくなら、これがゲマインシャフト團結であり、實際の社會集團にしてこのゲマインシャフトを支配的原理たらしめて集團範圍の確定する例は多い。家族、階級、倶樂部、研究團體等は皆その例である。然るに社會集團はそれ以上一層高度の構成原理として次のものを持つ。それは、接觸狀態の人々が個々に何等か利益觀念を抱き之を目的として追求する意志を以て協同提携する態度を採り、ここに新團結原理の發見されることである。例へば、人々金儲けのため相協同して營利會社の成るが如し。この第三原理が相互的接觸を前提たらしめ又、第二のゲマインシャフト原理をも必要とする點存するに拘らず、集團範圍が第三原理の存在から決定される場合は少しとしない。又假令、相互的接觸やゲマインシャフトを主たる構成原理たらしめる集團にあつても、多くは更にこの種類の團結を附け加へて、その集團的存在を完成する。

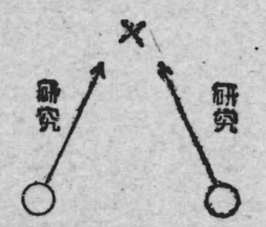
ゲゼルシャフト　吾々は新に問題となる集團構成の第三原理を以て、人々夫々何等かの利益觀念を抱き、この利益觀念を目的として追求する意志を以て協同提携することから成立つとしたのであるが、かくの如き團結に名づけてゲゼルシャフトと呼ぶ。之は意志的協同といふ意味である。ゲゼルシャフトの名稱も亦、テンニースの命名に係る、曾てルソーの提唱した社會契約說は、社會集團がこの意志的協同をいふ「契約」から成立つとしたのであるが、說の妥當する集團は今吾々のあげるゲゼルシャフトを主要構成原理とする種類である。凡ゆる集團が社會契約說の說く樣に意志的協同を以て生ずるとは認め難いが、然し契約說の主張する人間團結が集團構成上の一原理たるは疑ひ得ない所である。かくの如き團結原理を他の諸原理と共に採用し、殊に之をその性質からして社會集團の完成的原理と見ることが必要となるのである。

ゲゼルシャフトの事實　ゲゼルシャフトも亦人々の相接觸する狀態に於いて成立つ。先づ接觸する人々が夫々利益觀念を抱き、之を目的として追求するに當つて相手を選び、選擇が互に一致を見る時、始めてこの種の團結が作られる。この團結はゲマインシャフトの場合の如く、感情的盲目的に生ずるのではなく、寧しろ理性的自覺的に相手が選ばれ、相手に向つてこの意

味の積極的關係が設定されるのである。ゲゼルシャフトは相互的接觸の如く人々の意識に本質的關係を持たない團結たらざるは勿論ゲマインシャフトが意識的團結ながら自然的發生的であるに對し、故意的任意的であり、理性的自覺的な意志を中心とする。一言にして云へばゲゼルシャフトは人工的性質を有する。

ゲゼルシャフトの形式　ゲゼルシャフトは人々の追求する利益目的が個人的利益であるか、或は個人的利益以上のものであるかによつて、根本的に二つの形式に分れる。これ、人々の利益追求が相互的な利益交換の形をとるか、或は集合的な利益實現の形をとるかの相違である。前の場合には個人的利益の交換が目指され、後の場合には利益の共同性が存し、共同利益への

利益交換形式



利益實現形式

合力が企てられる。例として經濟市場と研究所とを比較對照するなら、その相違は明瞭となら う。かくの如く利益交換的團結と利益實現的團結とが根本の二形式であるが、多くの場合に於いて、二つの形式は混合され、人々は合力して利益の實現を計ると共に、その結果を彼等夫々の合力の報酬代償として分配する意味を以て、株式會社、協同組合等複雜なるゲゼルシャフト形態が存する。

ゲゼルシャフトの發生　ゲゼルシャフトは如何なる條件の下に發生するか。恰もゲマインシャフトの場合のやうにゲゼルシャフトも亦人々が豫じめ相互的接觸を爲すことが前提である。すなはち人々先づ接觸狀態にあり、然る上、彼等個々の目的到達上他人を相手として、求め、ここにゲゼルシャフトは成立つ。そこで、相手が自己の目的到達上補足性を持つとの認識が重要條件となつて來る。かかる補足性の認識あることにより、人々はよくゲゼルシャフト團結の態度に出る。然じ人々假に自己の目的到達上相手に補足性存するを認めるとしても、相手が實際上自己に對しこの補足性を以て協力して與れといふ

信頼の念を缺くならば、團結は決して生じない。ここに相互の間の信頼の念が決定的一條件をなして來る。然るに信頼の念とは、相手に對する一種の共屬感情であるからして、ゲゼルシャフトの發生にはこの一點に於いてゲマインシャフトの存在を前提とする。フィアカントは如何なるゲゼルシャフトもゲマインシャフトの存在を根抵たらしめると述べ、之をガリレオ的發見と誇つたのであるが、その說の意義はこの點に歸する。

種類　ゲゼルシャフトに類型を分たんとすれば、先にあげた利益交換的形式と利益實現的形式とを基準とす可きであるが、然し利益交換に於いて交換される利益が物質的效用であるか、精神的效果であるかに從つて、そこに細分が可能であらう。その結果、ゲゼルシャフトは次の如き種類に分たれる。

一、營利團結　人々個人的目的を追求する態度に出で、而して目的が物質的經濟的利益たるもの之である。一言にして之は利益團結といふ可く、株式會社はその模範的實例である。經濟界に於ける總ての團結が營利團結に屬すは無論の事である。營利團結の簡單なる形態は、經濟市場の如く人々直接利益の交換を營むものであるが、既に指摘した如く、一層進んだ一般形態は人々先づ合力を行ひ、合力の物質的經濟的結果を彼等の間に分配する意味を以て作られる。

そして、物質的經濟的結果が人々の合力に對し即時に報酬として支拂はれない點から云へば、之は間接的な交換關係即ち延期された取引關係と見るべきものである。

二、享樂團結　之は精神的娛樂的な個人的利益目的到達を企圖して成る團結を云ふ。例へばスポーツ、趣味、娛樂等の倶樂部、同好團體、仲間、協會等から學術團體、藝術團體、宗教團體等に至るまで、種類と內容とに富む。人人はこの種の團結により各自の精神的娛樂や滿足、即ち享樂を求めんとして居る。然し享樂即ち個人的滿足を目指すのがこの團結の特徵であるから、精神的ゲゼルシャフトと雖も私利私益を離れたものは、この種類とは考へ得ない。その場合には次の公共團結となる。要するに、享樂團結は精神的分野に於ける營利團結と見る可きものである。

三、公共團結　精神的目的から成るゲゼルシャフトは、屢々、個人的利益を超越した公共的利益實現の意味で成立つ。又物質的利益を追求するものにあつても、個人的私利私益以外のものを目的とするもの少くなく、その樣な總べての團結を公共團結と見る。人々公共的乃至社會的利益を目的に協同提携する團結が之である。慈善博愛の團體はその適例であるが、その他研

究所、藝術團體、宗教團體等にしてこの種類に屬するものは夥しい。公共團結に於いては、人々かの一體感を有して自他一體たる意味を以て全體の利益を追求する場合が稀でない。融和せる家族や又よく一致した國民に於いて、その例を見るであらう。

現實の集團　ゲゼルシャフトは社會集團の構成原理として、發生上、最後のものである。先づ人々の間に相互的接觸あり、次にゲマインシャフト成立ちその上のこととしてゲゼルシャフトが添加されるのである。かくて、初歩の社會集團は相互的接觸のみを以て構成され、又一部の集團は之にゲマインシャフトを加味して存するのであるから、理論上、社會集團はゲゼルシャフト團結を缺くもなほ實在し得るのであるが、然し大多數のものは相互的接觸やゲマインシャフト團結以上、同時にゲゼルシャフトをも實現する。この意味から云つて、完全なる社會集團はこれ等三種の構成諸原理を共に有すと云ふ可きである。テンニースがゲマインシャフト、ゲゼルシャフトを集團構成上、對立原理と見たのに對し、ガイガーが兩者を補足的原理と見做したのは一歩の前進を物語るが、吾々は更に相互的接觸といふ根原的團結原理をも加へ、これ等三つのものが補足し合つて、ここに實際の集團が構成されると見るのである。

ゲゼルシャフト的社會過程　相互的接觸、ゲマインシャフト及びゲゼルシャフト等團結諸原理が實際の社會集團に共に含まれる結果、社會過程は複雜な形で展開することとなる。然し分析的に考察すれば、ゲゼルシャフト團結には特有なる社會過程の種類が對應する。ゲゼルシャフトに於ける目的性に支配される規律ある生活活動がそれである。例を組合に採れば、組合の團結目的から生活活動の一定する如きはそれである。或る種のゲゼルシャフトにあつては、そこに營まれる社會過程を豫じめ規約として示すものさへ見受ける。規則、規定、服務規律等それである。要するに、ゲゼルシャフトの協同提携の內容を明らかならしめれば、社會過程は一應之を推定し得るのである。政府、官廳、會社、組合等に於いて、この點は決定的である。そこで、ゲゼルシャフトを主要構成原理とする社會集團を機關團體と稱し、普通のものから特別扱する見方を生ずる。然し如何なる機關團體と雖も、結局に於いて社會集團の一種たるは明らかである。

總　括　社會集團を分析した結果、社會集團は之を具體的に問題とする場合と抽象的に解する場合とに於いて、著しい差を生ずるを認めねばならぬ。例へば都會、家族、組合等は之を具體的に見る限り、相互的接觸、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトの構成三原理を共に包含する。然るに、各集團の特徵的構成原理たる意味を以て、相互的接觸或はゲマインシャフト或は、

第三篇 社會過程

第一章　社會的行爲

社會的生活活動　社會集團の內には種々雜多の生活活動が營まれるが、それは總べて人々動反動する作用である。家族的相互扶助、分業的協力、革命的爭鬪、經濟的競爭、敎育的指導、政治的支配等、一切はかかる性質の作用活動である。人は如何なる生活活動を行ふに當つても個人を作用主體たらしめる。然し、これと同時に、生活活動が當該個人だけのものに終り、他に影響する所無いのも亦殆んど絕無であらう。それは常に他人に影響を及ぼし、人は又之を意識に上ぜつつある。そこで、心的性質を持つ動反動がそれであつて、社會的活動卽ち社會過程となるのである。

社會的行爲　社會過程に幾つかの樣相を見受るのであるが、最初に最も要素的なものを問題としたい。社會過程はジムメルの說いた樣に、心的相互作用と概念することが出來るが、心的

相互作用は之を當事者個々の動きにまで溯つて、始めて充分に規定出來る。人間生活活動は意識的たる故に行爲をなし、他人に關係交渉する所に社會的行爲となるから社會的行爲こそその出發點である。社會過程は人の他人關係的行爲卽ち社會的行爲から組立てられる。マクス・ウエーバーが社會的行爲を重要視したのは適切な見解であつた。社會的行爲が社會過程の窮極的要素であり、その最初の問題となつて來る。

個人的行爲と社會的行爲　總べて個人の行爲は純然たる彼一個の行爲たる以上、常に他人を相手とし、又他人に關係する行爲である。例へば隱遁者の行爲は社會的行爲でないが、普通一般人の行爲は直接或は間接に他人に關係交渉を持つものであつて社會的行爲たるを證する。人の孤立が例外なるが如く、純然たる個人的行爲は稀である。人間生活と社會生活はかくの如く不可分關係にあるのであるから、人間生活を個人的にのみ考察するは充分でない。之を社會的に見直す必要あるは明らかである。人間生活を生物學的に、心理學的に說明する以上に、社會學的觀點から研究するを要する理由、ここにある。

社會的行爲の意識性　社會的行爲は社會過程の要素であるが、之は他人關係的意識的活動として、外面的に他人關係性を有するのみならず、之を內面的にも意識する。マクス・ウエーバーが社會的行爲を「主觀的に他人に關係する行爲」と定義したのはこの故であつた。唯、この場合に於いても、行爲者に於いて他人關係性が常に明瞭に意識されるを要せぬことは注意すべきである。

人間行爲の原動力　社會的行爲は、元々、個人の行爲であるから、その發生を問ふ場合には、個人に於ける行爲原動力を問題とせねばならぬ。人間行爲の原動力は如何。學者は之に答へて本能、關心或は慾望を擧げる。例へばマクドゥガルは行爲原動力として脫爭本能、嫌惡本能、好奇本能、爭鬪本能、服從本能、自己主張本能、慈愛本能、生殖本能、群棲本能、獲得本能、建設本能等の十一を數へたのである。思ふに、行爲の原動力は本能と稱しても、關心と云つても、又慾望と名付けてもよいが、要點は人間を內部から衝き動かす根本的動力である。吾々はかかる原動力を基本的關心と社會的な派生的關心とに分ち、基本的關心として生物的關心及び心理的關心を擧げやうと思ふ。基本的關心と派生的關心も一層細かな種類に分れ、それを表示すれば次の如くなる。

- 人間行爲の原動力
  - 基本的關心
    - 生物的關心
      - 生存的關心
      - 生殖的關心
      - 發展的關心
    - 心理的關心
      - 情緒的關心
      - 意志的關心
      - 理智的關心
  - 派生的關心
    - 對人的關心
    - 對物的關心
    - 超越的關心

行爲の社會化條件　併し乍ら、これ等の行爲原動力を以て、個人の行爲の發生が說明されるとしても、それだけでは、行爲の社會的となる點明らかでない。當然問題となるは、個人的行爲が如何なる條件の下に社會化するかである。然るに、個人的行爲が社會的行爲となるは、行爲の當事者が社會集團を形成するからと見なければならぬ。つまり、人は他人と團結狀態にあることから、その行爲を具體的に社會化するのである。

先づ人々相互的接觸狀態にあるなら、接觸する他人に對し無關係の立場に於いて行爲するを得ず、行爲は當に他人に關係し他人に影響を生ずる。この事、既に相互的接觸に於ける社會過程として說く所があつた。次にゲマインシャフトをなす場合、人々は互に感情的融和關係にあるのであるから、相手は感情上に於いて肯定承認されて居り、行爲は相手に對する共屬感情に基いて社會化される。例へば家庭を持つ人の行爲が妻子眷族を顧慮して行はれる如し。又ゲマインシャフトが深められ、自他一體といふ一體感によつて團結するならば、行爲は他人を含む集團本位の行爲として本格的に社會化して來る。さきにゲマインシャフトの社會過程を以て、親和的犧牲的特徵を持つとしたのは、この事であつた。更に人々はゲゼルシャフトをなす場合に於いては、相手を自覺的に承認する態度存し、行爲をこの相手に關係せしむるを約束して居るのであるから、行爲の社會化は絕對的である。經濟市場に於ける人々の行爲が取引交換の行爲となるは、その例である。先に吾々がゲゼルシャフトに於ける社會過程を以て、團結特有の目的性によつて支配される規律ある活動としたのは、この事である。

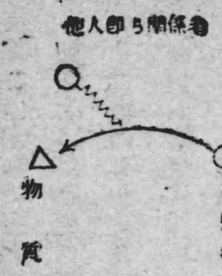
社會的行爲の分類　人間行爲は社會的行爲をなすから、社會的行爲の種類はそれ自體千差萬別である。經濟的行爲であり、政治的行爲であり、又宗教的行爲、娛樂的行爲等であつて、こ

れ等諸種類内の一層細かな内容をなすこともある。社會的行爲はかくの如く複雜多樣なものであるが、基本的種類に就いて見れば左の諸形態に分れるであらう。

一、直接的社會行爲　人間行爲の内、最も明瞭に他人を相手として有するものであつて、疑なく社會的行爲たる種類である。主なる内容を擧げれば、意味傳達現象たる言語的行爲、統治卽ち社會諸事象の組織的統制を行ふ政治的行爲、又社會集團の有する各種の文化内容に選擇を行ひ、之を不完全なる成員、子弟に授與する作用たる教育的行爲等がそれ。之等の言語的行的行爲、政治的行爲、教育等は、人が能動者の立場に於いて積極的に行ふ種類であるが、別に受動者の立場に於いて行ふ消極的種類として次のものを數へる。政治的法規の遵守を强ゐられる法律的行爲、集團成員の大多數の現に支持する慣習に從がふを强ゐられる道德的行爲等それである。畢竟、直接的社會行爲には能動的積極的な種類と受動的消極的な種類とが分れ、彼等の内容も亦區々であるが明瞭に他人を相手とする行爲たる特徵を有し、これ故之は對人的行爲と解し得る。

二、間接的社會行爲　之は間接的に關係者を持つ行爲であつて、或る場合に於いて、純然たる個人的行爲と考へられる種類である。この種類は對立的な二系統に分れる。一は直接的には物質事物に對する行爲であり、その二は直接には超越的價値に向ふ所の行爲である。今これ等二系統に就いて、個々に說明することとしたい。

A　對物的行爲　之は直接的には物的事物を相手とする行爲である。先づ物質事物を變へんとする技術的行爲の總べてが之に屬する。技術的行爲は現在、科學の認識を前提とし科學理論の應用として行はれるが、原始未開時代にあつて人は神秘的な呪術を本として同一事を企てた。現代に於いてさへ、かかる幼稚なる遣方は消滅しては居らぬ。之は正確には技術的行爲でなく、魔術的行爲と謂ふ可きものである。然し上記孰れのものに於いても裁培、加工、捕獲、飼育が行爲の實際であつて、これが人間生活に役立つ點に於いては生產的行爲と見做される。對物的行爲の今一つは經濟的行爲である。經濟的行爲は技術的行爲の如く事物の性質を變へるのでなく、之を運搬或は交換して人間生活に役立てるのである。技術的行爲、魔術的行爲、經濟的行爲の何れのものも、間接的には他人の關係する事が認め



られ、この意味からして社會的行爲となつて居る。

B　超越的行爲　直接には超越事物卽ち價値に對する行爲であり、間接的に他人に關係するもの、之である。神を相手とする行爲として宗教的行爲、眞理を追求する行爲として認識的行爲がある。認識的行爲に於いて、研究對象を經驗界の事實に限り、批判論理的にその眞相を突止めるは科學的研究であるが、之とは性質の異る認識的行爲として神學的解釋、形而上學的考察等を數へる。

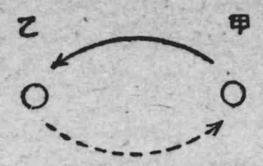
なほこの外、超越的行爲として美的價値の發見と表現とを行ふ藝術的行爲や、行爲そのものに感情的價値を見出して滿足する娯樂的行爲を擧げる。これ等の總べてを超越的と云ふは、行爲が人に對しても物質に對しても、直接的には交渉を持たない故である。

結論　社會的行爲が多くの種類に分れると共に、人間行爲は社會的行爲たる關係から、人間行爲も亦これ等社會的行爲の種類以外に出でないことは明らかである。之は改めて說明するを要せぬことと思ふ。

第二章　社會關係現象

その概念　既に述べた如く、社會過程は要素的には人の社會的行爲から組立てられる。個々人の社會的行爲あり、それによつて社會過程が集大成されるのである。然るに、人が他人に向ひ何等か社會的行爲を行ふなら、多くの場合、相手方たる他人も亦この社會的行爲を刺戟として受け取り、それに對應一致する反作用的行爲を以て反應するを見る。社會生活活動の動反動が之であつて、結果に於いて、社會的行爲の作用反作用が一聯の關係形態をなす。例へば甲の商談に對し乙は受諾を以て酬ひ、救援の申込に對しては應援し、一方が挑戰的行動に出づれば他方は對抗的態度に出で、支配者の命令は服從者之を遵奉し、結果として取引、相互扶助、鬪爭、支配服從等の現象を見るが如し。大多數的の社會的行爲は一方的たるに終らず、それに對應一致する樣な相手の社會的行爲を反作用として導き出し、作用反作用する一系統の社會的諸行爲が相互關係的な特別形態を作り出し、相互關係的に說明される現象となつて來る。ジムメ

ルが社會過程を相互作用と見做したのも、この相互關係形態に注目したからの事であつた。ヴイーゼが社會過程を「社會關係過程」と定義した理由も亦、ここにある。吾々は對應一致するこの關係形態を社會關係現象と呼び、社會過程の第二次的樣相として考察しなければならぬ。



反作用の社會的行爲を缺く

一方的行爲と分裂現象　然し、人々の社會的行爲は總べての場合に於いて、社會關係現象を形成しない。甲の乙への社會的行爲が、乙の側から反作用として、甲への社會的行爲を導き出さぬなら、そこに甲の一方的作用あるのみである。取引の申出に對し、相手が頓着せぬはその一例であつて、之は社會的行爲が一方的行爲として止む場合である。又一方の社會的行爲が相手の側の反作用を誘發するも、之が最初の社會的行爲に對し、意味上一致を缺く場合も無い譯ではない。例へば甲の取引の申出に對し、乙はこの申出を誤解我は故意によつて挑戰と採り、對抗的行爲を以て酬ゐるが如し。この場合は二つ以上の一方的行爲が不自然に連結せるのみ。分裂現象であつて、社會關係現象は同じく實現されない。そこで、社會關係現象は一部の學者の考へる如く、凡ゆる社會的行爲が殘りなく之を形成するものでもなく、又單純なる相互作用でもない。意味上互に一致する二つ以上の社會的諸行爲から成立つことがその要點である。蓋し、意味上よく對應一致する社會的諸行爲の場合に於いて、吾々は彼等を統一的に見通し且說明するを得る立場に置かれるからである。かくて、取引現象も爭鬪現象も又支配服從現象も、それを組立てる社會的諸行爲の間に共通する要素が含まれて居り、かかる共通要素が現象の統一的把握說明を可能ならしめるのである。

社會的諸行爲が意味上一致する

社會的諸行爲が意味上一致する

社會關係現象の種類　社會關係現象は如上の意味で對應一致する社會的諸行爲から形成されるが、それに要素たる社會的行爲の種類は直ちに以て社會關係現象の種類たり得ず、後者は前者の相互關係性に從つて新たに分類されねばならぬ。社會關係現象の基本的種類は、從來「社會關係の基礎形式」と呼ばれたものであるがこれに次の三つを擧げ得る。

一、和合現象　人々互に相手を積極的に肯定しつつ營むもの之である。和合現象は人々の肯定——肯定の關係から行はれ、それ故、對等現象となつて居る。取引、協力、分業等諸多の現象は之に屬する。面して和合現象を行ふに當つて、人々グマインシャフト的に團結して居るか、或はゲゼルシャフト的に團結して居るかの差により、現象は更に扶助現象と協力現象とに分れる。扶助現象とは所謂相互扶助の現象を云

ふ。之はゲマインシャフトがその根底に存するによつて、人々相互の人格少くともその一部を保存伸長せしめる傾向のものであつて、感想的基礎の上に於いて事物の保全作用が現はれる。クロポトキンが相互扶助を以て理想的生活と見做したのは興味あることであるが、相互扶助は事物の保全作用にのみ傾く結果、改造進歩に役立つ現象ではない。かかる發展的作用は協力現象を俟つて始めて可能である。卽ち協力現象にあつてはゲゼルシャフトが背景たることから、何等かの利益、目的の追求が行はれ、現狀に對する創造、改革作用が現はれる。換言すれば、意志的取捨の上に事物の選擇作用が行はれるのである。

二、敵對現象　之は人々相手を否定する態度を以て行はれる爭鬪現象である。敵對現象は爭鬪及び論爭に實例を見るのであつて、ダーキン主義者は敵對現象を以て人生の姿と考へたのである。既に指摘した如く、敵對現象は相互的接觸の狀態に生ずること多いのであるが、人々の反感から動機が與へられる場合と、然らずして意志的排斥態度による場合とがあり、この點からして反撥現象と抗爭現象とに分れる。反撥現象は犯暴であつて、相手の人格の全部、少くともその一部分を驅逐廢棄する結果が現はれ、破壞作用を營む。抗爭現象に至つては、形は同じく爭鬪であるが、一定の利益、目的の下に相手を否定するものであるからゲマインシャフト或はゲゼルシャフト團結の存する場合に於いても成立つ。而してかかる集團原理の存する時、抗爭現象は規律あるものとなつて穩和化する。論爭とか競爭とか云ふ間接的爭鬪形式の現はれるのも、この時である。抗爭現象により各種の事物の解消削除があり、淘汰作用が行はれる。敵對現象を和合現象に比較すれば、消極的役割を演ずると云つてよからう。

三、上下現象　所謂支配服從の現象が之であつて、ニーチェの如き、人間生活を之のみと考へたのである。抑々上下現象とは、一方の相手に對する肯定的態度あるに對し、相手に於いては否定的態度存し、而も一方の有する權力、威光がこの否定態度を肯定的態度に轉向せしめる所に生ずる。上下現象は、この意味から、和合、敵對兩現象孰れのものに屬せざる第三型となるが、又これ故に、上下現象の相手の側に於いては、怨恨感情や消極的抵抗態度が殘留することになるのである。上下現象に於いて、相手の否定態度がゲマインシャフト的に肯定化するか、ゲゼルシャフト的に肯定化するか、換言すれば、相手の轉向が心服の筋道を採るか、或は背に腹は代へられぬ觀念によるかに從ひ、承服現象と制壓現象とが區別される。例へば親分子分

間には承服現象が行はれ、暴君と臣下との間には制壓現象を見やう。上下現象は敵對現象の結果現はれること少からず、諸部族互に抗爭する結果として優勝者が敗殘者に對し征服的支配を行ふことがある。然し、この關係は必然的ではないのであるから、上下現象を敵對現象の所產としてのみ考へるは許されない。承服現象によつて、人間生活は支配者の意向に基づいて同化され、種々なる文化が擴布の機會を與へられる。之に反し、制壓現象からは强制的同化卽ち人爲的適合調整が加へられて行く。そこで承服現象を同化の原理となし、制壓現象を調整の原理と見做し得る。なほ搾取といふは支配者のみが、利益し、服從者が損失を被る場合であつて、服從者が反つて利益を與へられる場合に於いて、それは指導と稱せられる。畢竟、搾取と指導とは、利益損失の觀點から上下現象を見たものである。

模倣　如何なる種類の關係現象に於いても、一特殊現象がそれに附帶するを見るであらう。模倣の現象がそれである。模倣とは、人が相手の態度行動をその儘自己に反復する作用を云ふ。模倣は社會關係現象の種類如何によつて圓滑に行はれる場合と、然らざる場合とがある。例へば和合現象にあつては、敵對現象に於けるよりも容易に行はれ、又これ等兩者の場合よりも、上下現象特に承服現象に於いて、服從者が支配者を眞似ることが顯著である。唯、如何なる關係現象の種類に於いても、當事者間に模倣の行はれる事實であるから、タルドは之を「基礎的社會現象」と見たのである。模倣はその實際に於いて簡單なる現象でなく、內容的に衝動的模倣、優勝模倣、合理的模倣等を數へる。模倣は人々相互の同化の原理をなし、彼等の類似性を增すと同時に、文化內容の生成傳播を促進する。これ等の點で模倣現象は特筆的事實であると云はねばならぬ。

傍觀者　社會關係現象の當事者たる人々、卽ち行爲者に對し、屢々消極的オブザーヴァーとしてそれに關與する傍觀者があるが、この傍觀者の營む役割は注目に價する。傍觀者はオブザーヴァーといふ外、局外者、第三者、監視者、審判官等種々の名稱を以て呼ばれるのであるが、彼等は積極的に行爲者として行動する者でないにも拘はらず、行爲者の行ふ關係現象に對し干涉の可能性を持つこと、人道或は規律の支持者として作用すること等によつて、關係現象を牽制し、特にそれに秩序づける。道德的規律の源泉が傍觀者の存在にあるとの說は、確かに洞察的であつたのである。

社會的距離　關係現象の性質に從ひ當事者間に社會的距離なるものが考へられる。社會的距離とはヴィーゼ或は米國諸學者の重視する所であるが、これは社會過程から集團の形成或は破壞の行はれるを注目し、集團解體と團結化の傾向、換言すれば社會集團の安定度乃至は人々の接近―疎隔を標準として集團成員間の距離の大小を定めるものであつて、この觀點から次の如き距離の差等が區別される。すなはち、和合關係の人々は上下關係の人々の場合より社會的距離小であり、敵對關係の人々に於いて社會的距離は最大なりと見る。又同じく和合關係の人々に於ても、扶助關係の人人の方が協力關係の人々に比して距離を小ならしめ、同じく上下關係の問題として、承服關係の人々の距離は制壓關係の人々よりも距離が小であるとし、さらに敵對關係の問題として、反撥關係の人々は抗爭關係の人々よりも距離大であると見做すのである。

かくて、社會的距離の順位は次の如くになる。

(近接)小←大(疎隔)

和合關係	(扶助關係	協力關係)	小接近―――――大疎隔
上下關係	(承服關係	制壓關係)	
敵對關係	(抗爭關係	反撥關係)	

第三章　集團活動

集團外の社會過程　社會過程は要素的に社會的行爲から成立ち、社會的行爲は又組合されて社會關係現象をなすのであるが、これ等孰れの現象も社會集團の團結を俟つて行はれる。一派の學者は社會集團を俟たぬ集團外の社會過程を認めんとするのであるが、それは吾々に於いては定義的に成立ち得ぬ。事實上、集團外の社會過程と呼ばれるものに二通りのものを數へる。一は一時的性質の過程であつて會談、取引の類がそれであり、その二は戰爭、爭鬪等の敵對現象、特に狂暴非人道的な反撥現象がそれとしてあげられる。然るに吾々は、人々の團結が如何に一時的であつても集團の存在を認め、且又相互接觸といふ團結原理を擧げるのであるから、集團外の社會過程の總べては集團內の現象となり來るのである。

集團活動　社會的行爲や社會關係現象が社會集團を俟つて生起、展開する現象なると共に、注意す可きは、特定集團內の社會過程が全體として秩序あるものなること、又屢々、それが集團中心的に組織化される事實である。新開地に於ける生活はなほ亂雜極まりなきものであるが、年處を經た農村生活は規律化して居り、自覺的な民族の生活活動の如きはよく擧國一致化

して來る。一見、亂雜極まりなき無組織、無秩序の生活活動と雖も、それが當該集團の社會過程である點よりすれば、之も亦廣い意味では集團的作用と云へないことは無いであらう。吾々はこれ等總べての場合を一括して集團活動と呼び、之を社會過程の第三樣相として考察したいと思ふ。

集團活動の解釋　社會過程が社會集團を範圍として秩序あり、組織ある作用として現はれるは、早くから注意せられた所であつて、社會生活と個人生活との相異がこの所に考へられた。社會有機體說は社會を有機的存在と見、その生理現象たる意味に於いて之を解し、全體主義の認識も亦、社會を不可分的全體と前提して、その現象を解釋するを常とした。ではあるが、有機的存在乃至不可分的全體といふ「社會」とは說明なしには承認し得ざるものであつて、吾々は事實に卽して集團活動の說明を試みなければならぬ。

普通の理解　特定集團內部の社會過程は、集團成員が彼等の生活境遇から何等か一定した性質、傾向を彼等の行爲に實現する時に於いて、よく集團活動の實を現はして來る。同一集團の人々にあつて、この種の生活境遇は豐富に存在するのであるから、集團每に生活現象の差異あるは勿論、秩序あり組織ある集團活動までを發見することが出來る。そこで、歷史家は屢々社會過程を個々人の行爲として論ずることなく、個々人の構成する集團全體の生活現象たる意味に說明し、例へば某々階級はしかじかの境遇の下に是々の生活を行ふ、一國家は特定事情から して斯々の意慾を遂げるといふ風の解釋を行つたのである。吾々日常の常識に於いても、之と同樣の說明は繰り返して採用され、社會過程が集團的に全體として理解し說明されるを見るのである。

その說明　その樣な理解と說明とが成立するは、社會過程が社會的行爲から組立てられるに當り、集合的に統一化を現はすによるのであるから、如何なる條件の下に社會的諸行爲が集合的に統一化して來るかを問はねばならぬ。この問題に關して擧ぐ可きものは、次の諸條件である。

一、團結による制約　社會過程は集團構成諸原理に從ひ統一化して來る。先づ最初に、相互的接觸の狀態はそこに展開する社會的行爲を或は促進、或は弛緩せしめる。直接的面接狀態は之を活潑にし、間接的交通的接觸は逆に之を遲滯せしめる。後者の短所は交通機關の進步と完備とによつて、或る程度補はれるだけである。次にゲマインシャフトの團結的程度異るに從ひ、社會的行爲はその親和的性質の差等を現はす。殊

に、その程度にして深刻となり、自他一體と感ずる一體感的團結に至るならば、總べての社會的行爲は擧つて集團本位のものとなつて行くのである。最後にゲゼルシャフト團結に內容上差異の存することから、社會的行爲は集團每に確定的性質を與へられ、就中合力關係をふくむものにあつては、合力的利益目的のため全體として方向上の統一まで與へられる。之は公共團結、又會社組合等に於いて、よく立證されるであらう。要するに、集團構成諸原理の特殊性あるに應じ、社會過程は集團每に統一化する。そしてこの統一化は性質傾向上の統一と運動方向上の統一とに分れ、後者の內に於いて全體的運動方向上の統一が含まれる。

二、環境による制約　ここに環境といふは、集團成員に對する周圍の情勢をいふ。先づ外的環境として地理の如何、生物界の狀況等が問題となる。地理と生物界が一定の狀況を以て集團人に對し作用する結果、個々の集團の社會過程に夫々特殊的性質傾向が與へられる。かかる性質傾向は生產的現象方面に於いて殊更顯著であるが、この方面以外の現象と雖も、間接的には同一特性を示すであらう。外的環境以外、人種の如何、人口の大小等所謂內的環境が問題となるが、それ等も亦社會過程に對し一定した特色傾向を授ける。白人種の生活と黃色人種の生活とに夫々差があり、人口の大小に從ひ社會現象が大規模或は小規模となる等、皆その例である。然し、最も大なる役割を演ずる環境は、結局、文化環境でなければならぬ。文化環境とは慣習、制度、思想等の總稱であつて、それはやがて吾々の社會形象と呼ぶ所のものであるが、かかる文化環境の影響感化の下に、集團人の行爲は運動方向上に於いて統一され、秩序的のものとなる。武士道の道德存する處、尙武の行動と正義の思考が行はれ、資本主義的經濟制度の支配する時、打算の態度と營利活動の盛なるを見るであらう。何れにしても、外的環境、內的環境及び文化環境を集團人が共有する結果、集團每に性質傾向上特色あり、又運動方向上秩序ある社會過程の出現するは不可避である。

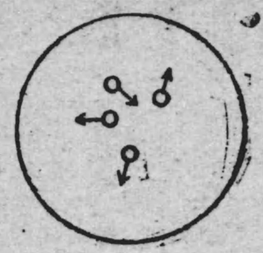
三、社會統制による制約　然し、吾々が以上二種類の統一化のみに注意を奪はれ、社會意識の方面からする統一化を忘れるならば、非常なる手落となる。すなはち、之迄の統一化だけでは、集團內の社會過程が性質傾向上、又運動方向上統一するは理解されても、それ以上、集團本位的な運動方向上の統一を現はすことは說明されない。集團本位的な運動方向上の統一、卽ち組織化が高度の集團活動をなすのであつて、民族全體を主體たらしむる對外戰爭、全體主義的國家生活、團體示威運動等、皆その例となる。かかる高度の集團活動の成る原初條件は、ゲマ

インシャフト團結の一體感的狀態やゲゼルシャフト團結の公共的利益、目的であるが、その發達せるものはこれ等兩者が結びつき、一體感的集團全體の利益を公共的目的たらしめて居る社會的自我意識といふ特殊の社會形象の存在である。社會過程に對する社會的自我意識の集團本位的規定作用は、後に述べる社會統制であるが、社會統制の行はれる所、社會過程は確定的に集團本位的運動方向上の統一を現はし、集團を主體とする組織的活動の姿を呈するのである。

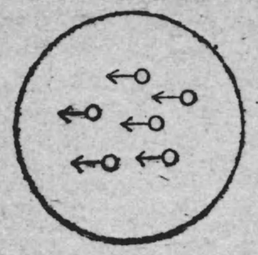
集團活動の種類　集團活動には、說いた所からして、性質傾向上に於ける統一と活動方向上に於ける統一とが區別される。前者は外形的集團活動といふ可く、後者が實質的集團活動であり、後者の內に集團本位的運動方向上の統一が含まれて來る。この點からして、集團活動の種類に左のものを分類する。

一、外形的集團活動　集團の社會過程に一定の性質傾向が認められるに止り、それ以上まだ運動方向上の統一の成立たざるものである。換言すれば、社會過程は他集團のそれと比較すれば性狀を異にするが、それ自體として秩序に乏しい形式である。さきに例示した新開地の生活はその適例であるが、現代大都會のそれも、同じく例證を供する。スペンサーはこの混沌たる社會過程を以て近代的形式と考へ、之を「產業型」と名づけた。又無政府主義の理想として描く社會生活の狀態の如きも、この外形的集團活動にあつたのである。

外形的集團活動



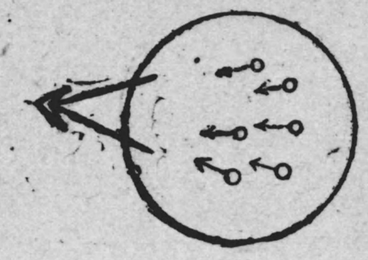
齊一的集團活動



二、齊一的集團活動　集團活動が運動方向上の統一を現はすは、人々一齊に秩序的行爲に出づるによる。ここに齊一的集團活動といふはこの種の秩序ある行爲であつて、而も、それが個々に個人的立場に於いて行はれる限りものを謂ふ。落付のある都會生活や平時の民族生活等はこの形式を採る。スペンサーは集團活動に「なす可からず」との命令ある場合と「なす可し」との命令ある場合の二つを分つたのであるが、「なす可からず」の命令あるのみの場合が、大略、齊一的集團活動に當る。自由主義の原理は社會統制を排し而も規律ある生活を期待する點に於いて、この種の集團活動を理想とすると考へられる。

三、全體的集團活動　運動方向上統一ある以上、この運動方向が集團本位的に一定するもの

之であり、組織的な種類である。之は社會統制の發動を俟つて確定的に成立つ眞の集團活動である。緊張せる集團、非常時の民族等に於いて社會的自我意識は刺戟覺醒され、社會統制の强化によつて、集團活動がこの形式で擡頭して來る。スペンサーはこの種の集團活動を「軍國型」であるとした。彼はこの場合に於いて「なす可からず」の命令のみならず、「なす可し」との命令の追加されるを指摘したが、これは社會統制の發動をこの點に觀取したからのことであらう。所謂統制主義が全體的集團活動を理想とするは、又明らかであらう。



第四篇　社會形象

第一章　文　化

社會意識　イヴーレーは好んで「精神は社會の賜である」といふ標語を使用したのであるが意味は、個人の精神が社會意識から感化影響されるを云つたのである。人が孤立せず常に他人と集團を形成し、又その活動に於いて純然たる個人的行爲を營み得ない樣に、彼の精神と行動も社會的所產と見られる。社會意識、時代精神と稱する樣な社會的なるものが、個々人の精神と行動とを支配するのである。イヴーレーは精神に就いてのみ上記の見方をなしたが、獨り內面的精神のみならず人の外面的行動も亦同じく社會の賜である。而も、ここに社會と云ふは社會意識乃至時代精神の謂であつて、之は廣く社會形象と名づけるものに當るのである。

文化構造物　社會形象は實質的に文化と稱してよいであらう。唯、普通に文化と云へば何等か價値物を意味せしめるのであるが、ここに文化と云ふは、價値の有無を論せざる社會的構造

333056

物の謂である。

この意味の文化を、人の主觀的精神が客觀的に凝結したものとなし、客觀精神と稱したことがある。然しその場合に於いては、精神的形態のみに偏重する弊に陷る。殊に之を民族心理のみに限定する者があるが、それでは民族以外の各種集團の社會形象的事實が除外される不結果を生ずる。

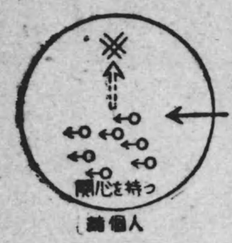
文化と文物　文化構造物を問題とするに當り、器具、機械、觀念、シムボル、作物の類をそれとして考ふるは不當である。即ち、これ等の事物は文化的要具であつて、文化に參加しそれに役立つ文物たるに過ぎず、本來の文化ではない。この事は、古代の文物が遺物として現存する場合に於いても、之を使用せる生活樣式が亡びて無い以上、古代文化の既に存在せぬを以て明瞭であらう。文化としては生活樣式が主である。そして文化的生活樣式とは、人間生活に對し標準的な行爲の雛型たるものである。かくて、政治的文化は政治的行爲の標準的雛型であり、宗教的文化は宗教的行爲の標準的雛型であり、人間行爲には內面的な思考もあれば外面的な行動も亦存し、その孰れもが社會的行爲となり社會過程となる關係上、文化は結局、社會過程の標準的雛型であると謂つてよい。

思想部類と慣行部類　人間行爲即ち社會過程は內面的思考たる外、外面的行動たるもの多數である。そこで、それの標準的雛型たる文化構造物にも、內面的思考樣式と外面的行動樣式の二種類が區別される。デュルケムがそれに思考樣式と行動樣式とを擧げたのは適切のことであつた。思考樣式に當るは思想部類であつて、これは所謂イデオロギーを謂ふ。之に對し行動樣式として慣行部類が對立する。それは慣習、制度を云ふのである。總べて文化は思想或は慣行の二者孰れかの形態で存する。

文化生成の原理　文化構造物は如何に生成されるか。之に對する解答は、社會過程の標準的雛型が如何にして作られるかの說明であらねばならぬ。抑々社會過程はヴィーゼの見る樣に、

社會過程＝(人々の)環境×結合

の公式に要約されるのであるから、同樣の環境下に生活する人々の行爲は常に一定する傾向に支配され、ここに一定行爲が標準的雛型となる根本の理由を發見することが出來る。先に集團活動の事實に於いて見た樣に、同一集團の人々は關心、慾望の點に於いても、環境の點に於いても多くは類似する者であるから、彼等の間に社會過程



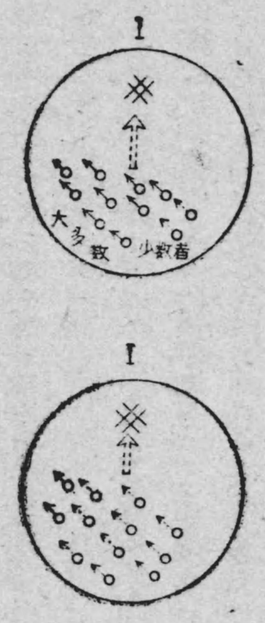
の標準的雛型卽ち文化構造物の成立するは、一般的に見て當然と云つてよい。

試行錯誤　尤も關心、環境等に於いて相等しき者に於いても、彼等が最初から、一定の標準的雛型に就くとは斷言し得ぬことであつて、人々、初の間は、暗中模索的に種々なる行爲の試圖に出づるはよく見る所である。然し、かかる試みの失敗と成功とに經驗を重ねるならば、不適當の行爲は放棄され、有效なる行爲のみが殘り、遂には一定行爲の採用に落付く。この手續を試行錯誤と呼ぶのであるが、試行錯誤によつて一定行爲は次第に標準的雛型として確定される。一例を都會地の通學に擧ぐれば、之に關しても種々なる仕方はあるであらうが、結局に於いては電車通學といふ標準的雛型の現はれるが如し。

合理的模倣　試行錯誤の手續以外、今一つの事實がその間に存する。それは合理的模倣といふ手續であつて、同一環境の下に同一關心から行爲する者の場合、一層有效な仕方が他人の行爲に於いて發見されるならば、人は自ら試行錯誤の手續を經て適當なる行爲を發見して行くことをせず、他人の有效な仕方を直接模倣し、之によつて標準的雛型が容易に出來上る。この場合に於ける模倣は行爲の有效性を批判して行ふものであるから、之を合理的模倣と呼ぶ。合理的模倣は相接觸する人々の間に自然に行はれるものであるから、有效な標準的雛型は人間間の相互的接觸によつて傳達され、その結果、文化構造物は存在範圍を人々の接觸の推し及ぶ範域と一致せしめるといふ注目す可き事實が成立つ。かくて、一定文化構造物の地盤たる文化地域は相互的接觸の範域たる聚落であり、共同生活體であり、就中包括的な共同生活體であるといふ結果を見る。ウントが文化構造物を民族的共同生活體固有の事物と見做した理由を知り得るのである。

非合理的支持　以上の手續によつて、一定行爲が集團人の間に成立つのであるが、之は自己も他人も共に採用する關係から標準性が認められ、文化構造物となつて居る。然るに第二の問題として、特定行爲は例へば宗教的禮拜等に於いて見る樣に、集團內の大多數が之を採用する場合に於いて、個々人はその合理性如何を問題とせず、只管盲目的に之に追從する傾がありのであつて、盲目的に追從する所に之を同じく標準的雛型として支持する關係が現はれる。この現象を、人が大多數者に雷同する「集團本能」を有する故として說明する者があるのであるが、事實は當該行爲の成功率の觸感と、相手に對する共屬感情乃至一體感あることに基づく。人は

成功の可能性を觸知感覺する他人の行爲や、ゲマインシャフト團結の相手方の行爲を盲目的に受入れるのである。それであるから、大多數者の行爲でない場合に於いても同一現象に接するのであつて、大衆が祖先或は指導階級の行爲を標準的雛型として支持する事實の如きも成立つ。孰れにしても、合理的手續から成立する一定行爲は、非合理的な第二の手續によつて標準



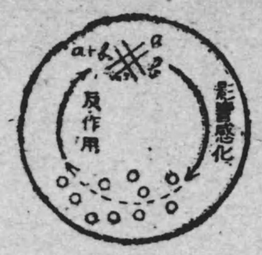
的雛型性を高め、文化構造物たる存在性を强化する。かくて一定行爲は標準的雛型として採用されると共に愈々支持される關係にある。文化構造物はこの手續の反復から確立されて行く。

文化の種類　文化の生成右の如しとするなら、發生上合理的手續による文化構造物の種類を制度となし、非合理的手續によるものを風習となし得るであらう。然し、通例これ等二つの種類は嚴密には區別し得ないのであるから、前に擧げた樣に、外面的行動方面に成立つ種類を以て慣行部類となし、それと異り內面的思考方面に成立つものを思想部類となす可きである。唯、如何なる外面的行動と雖も內面思考を含み、又多くの內面的思考は外面的行動を隨伴する關係上、その各々から成立つこれ等二形態も絕對的區別と考ふ可きではない。そこで文化構造物が物質事物に對する行爲の標準的雛型であるか、然らずしてそれ以外のものであるかによつて、物質的文化と精神的文化といふ區別がなされるのである。然しこの方針を採る場合に於いては、かの社會的行爲の種類に鑑みなくてはならぬ。すなはち、物質的文化と稱するものは對物的行爲に對應し、精神的文化はそれ以外のものであるから、彼等は對人的行爲と超越的行爲とに對應し、この點からして「社會的」文化と超越的文化とに兩分されるを認めなければならぬ。かくて、その分類が左の如くになる。

一「社會的」文化　言語、政治、教育、法律、道德等の慣行或は思想
二　物質的文化　技術、生產、魔術、經濟等の慣行或は思想
三　超越的文化　宗教、藝術、哲學、科學、娛樂等の慣行或は思想

社會拘束　文化的構造物が人々の行爲從つて社會過程の標準的雛型たるは、それが人々に對し客觀的存在と受取られる結果を生む。詰り、人々が行爲を營む際、それに標準となる雛型であるから、彼等の外部に存すると感ぜられるのである。そして客觀性を有する文化構造物は、人々に對し、次の樣な關係を現はす。すなはち人間は、動物の如くに自然界だけを環境とする者でないのであつて、諸種の文化構造物を環境たらしめ、自然界が影響を及ぼす樣に、文化構造物も亦その標準的雛型性から人間生活に感化を與へる。この事實をデュルケムは「社會拘束」と名づけたのであるが、之は正しくは文化の感化影響と考ふ可きである。吾々人間は集團の有する文化の感化影響の下に、それを實踐する意味に於いて生活し、この事を通して特定集團人たる性質を取得する。デュルケムが社會拘束の事實を重視したのは、寔に適當の見解であつた。

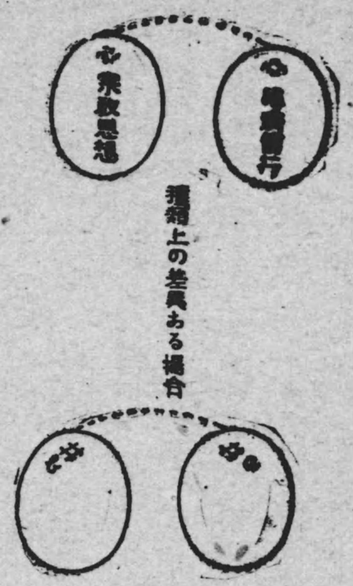
文化の變遷　文化構造物は人々の社會過程を感化影響するのであるが、他の一方に於いて、人々も亦文化構造物に對し修正變更を加へる反作用を行ふ。その際先づ成立つは個人の獨創的行爲であつて、この獨創的行爲にして幸に他の人々によつて採用支持されるならば、ここに在來の文化構造物が修正變更されて新らしい他のものが生成發展を見るのである。然るにこの間注意す可き問題は、個人の獨創的行爲と雖も、その主要部分は在來の文化構造物を實踐する際それから受ける示唆によるのであつて、獨創者は在來文化の受容者として在來文化に反作用を



行ふに過ぎぬ。そこで修正變更されて新たに生成發展する文化は、過去の文化の內から導き出されるといふ可きであつて、新文化は舊文化の延長と認められる。個人の獨創的行爲は確かに大切に相違ないが、之は思考上括弧し捨象することが出來る。文化の變遷を文化の自己發展として說明する企圖が、文化史研究上可能なる理由は、實に根據を持つのである。

第二章　社　會　性

社會性の概念　社會集團内に社會過程が營まれ、社會過程が營まれると共に、その疑結物として社會形象が生成される。吾々は、事實が文化の形態を採る關係上、之を文化構造物として說く所があつたのである。然るに、ここに社會形象は集團の異なるに從ひ、性狀を等しからしめないといふ事實がある。或る集團に於いては經濟慣行のみ存在し、他の集團に於いて專ら宗教思想のみが見られるといふ風に、文化構造物は先づ集團的に種類を異にする事であるが、又他方に於いて、同種類の集團は略ぼ同樣の文化構造物を有するに拘はらず、よく比較を行ふならば、集團毎になほ特異性がある。都會、地方個々に地方色あり、家族、民族等に夫々家風、國民性が區別され、會社組合等にあつてすら各自の特色傾向は顯著なものがある。吾々は後の場合に於ける文化構造物の集團的特色傾向を社會性と呼ぶ。この意味の社會性は寔に著しい事實であるから、之を社會形象に關する第二の問題として攻究したい。



社會性の考察　社會性は文化構造物に於いて認められるより、寧しろその拘束下に行はれる社會過程に於いで把握され易い。すなはち、各集團に於ける齊一的集團活動を比較するなら、地方色、家風、國民性等は一見明瞭となるのである。ではあるが、社會過程は嚴密には文化構造物の影響感化によつてのみ行はれるものではないから、この點を考へれば、獨り社會過程の比較を以て社會性を論ずることは當を得ないのである。

文化の集團的性格　社會性が同種類の集團間に於いてのみ問題たるのは、之が相互の比較を

俟つ事實であるからである。然し、同種類の集團間に比較を試みるとしても、若しそれ等の集團の文化構造物にしてそれ自體、統一的特色傾向を示さず、未だ混沌狀態に止るならば、社會性は之を突止めるに由ないこととなる。かくて社會性は文化混沌期に於いて問題となるものではない。それは文化統一期に於ける題目たるのみ。集團內の文化構造物がそれ自體、統一的特色傾向を示し來る場合に於いて、他集團の同じ狀態に達した文化構造物との間に比較を行ひ、ここに社會性が捉へられる順序となる。而も、吾々が一集團の文化構造物がそれ自體、統一的特色傾向を現はすを觀察する際に於いては、普通既に他集團の同じ狀態に達した文化構造物との比較を豫想して居るのであるから、この點から云へば、社會性は特定集團の文化構造物の統一的特色傾向であると云つて差支ない。この意味を以て、社會性を文化の集團的性格と稱することが出來る。

社會性發生の由來　文化構造物は人々同樣の關心を抱き、同樣の環境內に生活する時生成するのであるから、關心の點に於いても亦環境の點に於いても相異なる集團間に於いて、文化構造物がその種類を異にするは當然である。人々の關心、環境等の類似する集團間に於いても、細かく云へば、關心、環境はなほ幾分か差異あるを免れないのであるから、この點から文化構造物は種類に於いて相等しきも、特色傾向上に於いて相異なるといふ結果を生じ、個々に社會性が浮び上る。吾々は以上の點を念頭に置き、社會性の發生を突き止めねばならぬ。

原初的決定　如何なる種類の集團にもせよ、特定文化構造物は如何にして集團的性格を呈するであらうか。この問題は既に述べた點からして容易に解答出來る。すなはち、特定文化構造物は人々の關心と環境との所產であるから、當該集團のこれ等諸要素の特殊性に從ひ、集團的性格を表はすは當然である。而してこの場合、人間の有する關心が根本的には相等しいのを前提すれば、事實は專ら當該集團の團結關係や、自然環境また文化環境そのものの特殊なる結果であると考へ得るであらう。又、文化環境たる可き爾餘の文化構造物が未だ存在せぬ間、當該構造物の集團的性格は概ね自然環境の決定する所と見做すことさへ出來る。吾々は未開部族に於ける經濟、風俗等の慣行に就いてよくこの事實を觀察するを得る。

文化の相互的決定　第二の問題は、二種類以上の文化構造物が如何にして他集團のそれと異る統一的性格を實現するかである。ここに於いても、根本的には前述せる所がその儘妥當する

のであるが、特に考察を要することは、二つ以上の文化構造物が相互に文化環境をなす點である。彼等は共に集團人の關心、環境狀況によつて條件附けられて居るが、その上更に相互的に他のものに對して條件となり、それによつて最後的に社會性が決定されるのである。例へば、民族の經濟的生產樣式が機械的であれば、思想傾向も亦之に應じて合理的因果的となり、又若し一時代の宗敎思想が祖先崇拜的であるなら、政治制度もそれに從つて族長支配的となり來り、その間相互的決定が現はれるのである。

支配的文化　然るに相互的決定は事實上原則だけの話であつて、その內特定種類が一方的決定即ち支配的制約を行ふことを發見する。前例に就いて云へば、民族の經濟的生產樣式が思想傾向を制約しその逆の決定に乏しく、又一時代の宗敎思想は政治制度の性格を制約するも、後者が前者の特色傾向を決定するは微かなことがある。要するに、集團內の最有力な文化構造物の種類が、その有する固有の特色傾向を他の微力なる種類に對し强制實現せしめる事實を見る。今、有力なる文化構造物の種類を支配的文化と名づければ、かかる支配的文化が中心となつて社會性が實現されるのであるが、唯支配的文化は內容的に一定せるものでないことは注意を要する。すなはち、同一民族に於いても古代に於いては宗敎思想が中心となるも、中世時代は政治制度が支配するといふ風に、それが場合場合に於いて異つて來る。マルクス主義が凡ゆる場合に對し生產樣式を支配的文化と見たことは、明らかに誤りであつた。社會性を制約する支配的文化は集團狀態異なるにつれ、內容的に變ると思はなければならぬ。

その制約の機構　然らば、多くの文化構造物間に相互的決定あること、又支配的文化が現はれ、他のものの制約されるは如何にして然るか。之は根本に於いて、これ等文化構造物を採用支持する所の人々に人格的統一あることに因る。すなはち、人々は一方に於いて機械的生產樣式を採用すると共に、他方、それと全く特色を異にする非合理的思想傾向に出づるを得ない。又、一方に於いて祖先崇拜的宗敎思想を支持しつつ、それとは矛盾する傾向にあるデモクラシー的政治制度に就くことは出來ない。集團人個々の人格的統一があるのであつて、之によつて文化構造物間に特色傾向上の統一が促され、結果に於いて社會性の樹立を招來するのである。然らばその際如何にして支配的文化が現はれ、相互的決定關係を一方的制約關係に持ち來すであらうか。之は人々が支配的文化の種類を最も根本的な、從つて最も有力な關心からして採用

支持するからのことである。すなはち、人人かの基本的關心就中生物的關心を一定種類の行爲に對して結びつけるならば、その種類の行爲の標準的雛型こそ支配的文化となり來るのである。而して人間の基本的關心は常に一定した行爲の種類に結びつくものと限らないからして、支配的文化たり得るものは常住不變の一種類であり能はず、支配的文化は、場合場合によつて變動するといふ結果を來す。かくて、或る集團に於いては宗教思想が支配的であり、他の集團に於いては政治制度がそれとなる。之は又時代によつても異り、現代の如く、生產樣式が社會性の決定上中心的役割を演ずることも起るが、之が他の時代に於いても必然的に然ると云ひ得ないのである。

社會性の檢索　最少二種類以上の文化構造物を含まない社會集團は稀であり、而も、文化構造物は自然環境の如き根本的條件を彼等の性質傾向内に既に體現して居るから、社會性の最後的確定は文化構造物間の相互的決定、特に支配的文化の制約によると考へねばならぬ。多數の文化構造物を含む高度の社會集團にあつて、就中この事を認めねばならぬ。何れにしても、一度特定集團の文化構造物に社會性が確定されるならば、社會性は如何なる種類の文化構造物をとつても、之を把握し得る道理である。例へば現代特有の社會性は、衣食住の生活樣式或は社交上の慣行等に於いても現はれて居る。然し、社會性は常に同種類の集團相互の比較を前提するものであるから、凡ゆる集團に普遍的に存する文化構造物の種類を採り、之を尺度としてその檢索を行ふを適當とする。史學或は社會研究上に於いて、政治制度或は經濟慣行を尺度として社會を捉へ、それによつて歷史段階を設け或は文明形態を分つ企は、この點から了解されるであらう。ではあるが、社會性檢索の尺度としては、理論上普遍的存在性を證するものが望ましいのであるから、吾々はこの點から社會關係現象の文化構造物即ち社會關係的構造を推したいのである。この尺度を以てすれば、社會性の基本的種類は次の如きものとならう。

一　和合的社會性　例へば、近代民族のデモクラシー的特性
二　敵對的社會性　例へば、初期民族の戰國亂世的特性
三　上下的社會性　例へば、初期民族の封建的特性

社會性の價値　個々の場合の社會性は、實際研究によつて鑑別す可きである。世に東洋社會、西洋社會と稱するもの、又封建社會とか資本主義社會とか呼ぶものは、皆同一社會性に從つて區別される文化の集團的存在であつて、この手續によれば、文化構造物の性質傾向が總體的に見通し得られる許りでなく、之によつて拘束される社會過程迄を豫想し得るのであつて、研究上その價値は寔に大きい。屢々、社會研究上歷史段階を區劃し或は又文化形態を分類して

特殊研究を行はんとする者があるが之は、如上の理由から有意義なるを悟る。而して、凡ゆる文化構造物は先に述べた如く、人間間の相互的接觸によつて傳達されるのであるから、最も廣汎な相互的接觸範域たる共同生活體卽ち文化地域を採り、そこに文化構造物の社會性を突止めるは、その要望に答へる出發點をなす可きものである。

第三章　社會的自我意識

狹義の社會意識　集團內部に社會過程が營まれる時、その間からそれに對し標準的雛型となる思想、慣行、制度が組立てられて、彼等が集團每に全體的に現はす所の特殊的性質傾向が社會性の問題であつた。社會性は一集團の思想、慣行、制度等文化構造物の集團的性格であるが、今吾々は進んで、各集團の文化構造物の一要素をなす特殊の思想形態に着目せねばならぬ。すなはち狹義に於ける社會意識がそれであつて、通例輿論或は總意と呼ばれるものがそれである。文化構造物は社會過程と社會集團に對し感化影響を行ふのであるが、狹義の社會意識は集團本位の思想形態として、特に力强い拘束力を發揮し、特別注意を要するものである。

集團の生活原理　ここに問題となる狹義の社會意識は、之を社會集團の生活原理と云へば、よくその性質が明らかとなる。輿論にしても總意にしても、皆集團固有の生活原理を爲す。國家の場合に於ける國家の意志、民族の場合に於ける民族的理想それである。吾々は集團そのも

のの生活原理たる點から、之を社會的自我意識と總稱する。社會的自我意識は集團そのものの生活原理として特有なる拘束作用を行ふのであつて、之を社會形象の第三問題として取上げたいと思ふ。

社會的自我意識の性質　輿論、總意或は國家の意志、民族的理想等に現はれる社會的自我意識が、畢竟、一種の思想形態たるは明瞭であるが、その特質はなほ次の如きものである。すなはち、それは普通見る樣な個人本位の思想ではなく、それと對蹠する集團的建前のものであつて、集團全體を中心に考察、打算、計畫する集團本位の思想である。そこで屢々混同される樣に、之は社會性そのものではない。社會性は他集團のそれと異る一集團の文化構造物の統一的性格たるに止り、文化構造物の屬性に過ぎないが、社會的自我意識は文化構造物の含む特殊的一內容である。社會性は集團特有の文化的性格として思考上抽象的に把握されるに反し、社會的自我意識は集團本位の思想として文化的存在をなし、謂はば具體性を持つ。兩者の間には、例へば日本文化の性格と日本的生活原理との相違が

ある。

その發生　社會的自我意識は如何にして發生するか。社會的自我意識は本來一種の思想的文化構造物であるから、根本的には一般文化構造物の發生手續を繰返す。然しその內容は、既に云つた樣に、集團本位の思考であるからして、集團的思考が如何にして成立つかを問ふことが實際上の問題となる。抑々、集團本位の思考は、人々が一體感的ゲマインシャフトの團結を行つて、始めて可能である。ゲマインシャフト團結を行ふ人々は、普通は互に共屬感情を有するのみであるが、この共屬感情が深刻となるなら、相互に自他一體であるといふ感情に進み、こに自己と他人とを打つて一丸とする集團本位の思考が現はれる。集團本位に思考すると云つても、人々充分に之を自覺せぬこともあるが、その自覺如何に拘はらず、集團本位的思考が廣く採用支持されて思想形態となる時、社會的自我意識が成立つのである。

社會的自我の內容　社會的自我意識はかくして生ずるのであるが、注意す可きは、社會的自我意識に於いて本位とされる集團概念、卽ち社會的自我の內容は、現にゲマインシャフト團結を行ふ現存集團成員以外の者をも含み、同時に彼等の全體に親炙する種々なる事物迄採り入れ

ることである。すなはち、集團的自我は現存集團成員の外、彼等と曾てゲマインシャフト團結をなした祖先、先行者や、將來又彼等に對し同じ團結を作ると豫想される子孫、後繼者を含んで居る。それのみではない。これ等の人々が親しく採用、支持する文化構造物と之に參加する文物、特に社會性をよく表示する文化構造物と文物をば、それに加へて觀念する。例へば、我が民族的心理の場合、中心となつて居る大和民族の觀念中には、一億同胞は固より吾々の祖先と子々孫々を加へ、更に日本的文化と文物、特に我が國民性を最も明瞭に代表する國體、國實、領土をその不可分的要素たらしめるのである。

その潛在狀態と顯在狀態　社會的自我意識はかかる內容の社會的自我を本位とする思想形態であるが、無自覺的である間は漠然として居り、集團人の採用支持も亦非合理的であるから、風習形態をなすに過ぎない。この原初段階に於いても、社會的自我意識は外敵の脅威、內部の禍因等に對して相當敏感であつて、之に對する反發作用を集團人の態度行動に規定する。吾々は、外來人や反逆者に對する未開部落民の態度に、その實例に接するであらう。しかしてかかる作用は社會的自我意識が自覺化し、且又合理的手續によつて採用支持され制度形態たるに至つて、確定的なるものとなる。今日、文明諸國に見る政治現象はすなはちその例證である。それであるから、マクドウガルの如き民族集團に關して社會的自我意識を考察し、之が潛在狀態にある間民族は低い段階のものであること、顯在狀態に持ち來され初めて高度民族の存在するを云つたのである。

その確立の諸條件　然らば、社會的自我意識を確立せしめるは如何なる條件かと云へば第一には、人々のゲマインシャフト團結の深刻化であり、第二には社會的自我內容の確定に役立つもの、例へば社會性の完成があげられる。第三には、集團本位の思考を文化構造物化する條件、例へば、集團狀態の存續と社會過程の繼續が要求される。最後に第四として、人々が集團本位的思考を自覺的に行ひ、且合理的にこれを採用支持する刺戟として、他集團との接觸對立、集團內部の大問題、集團的責任、目的の發生等が數へられる。

分類　恰も個人意識に於ける樣に社會的自我意識には、感情的方面、意志的方面、理智的方面が分たれるであらう。そこで、これ等諸方面の何れの要素が支配的なるかに從ひ、その形態が集團感情と輿論と社會理想とに分類される。

一、集團感情　社會的自我意識が專ら感情的要素から成立つものを集團感情とする。集團感

情は感情的輿論と考へ得るであらう。國際的突發事件に直面して、人々集團の脅威、國辱等を感ずるは、集團感情の支配によることである。集團感情は群集心理現象の主要部分をなす個人的感情の亢奮そのものとは異なるが、それにも拘らず、群集心理現象の或る部分は集團感情の支配の下に行はれるのである。集團感情はその發現に於いて突發的なるを特徴とし、一時的に燃え立つも、又間もなく解消する性質のものである。

二、輿論　輿論が集團成員の共通意見でなく、又單に多數者の意見でもないことは既に定論である。輿論は國家の場合國論であるが、いづれの場合に於いても集團人の全體的意見であり、集團本位の意志的思想形態である。輿論は時々の現實問題を繞つて現はれ、恒存的性質を持たぬ。一定期間存立するに止り、變化流動して止まない性質のものである。米國に於いて禁酒法制定の輿論が成立した後數年にして、逆に禁酒法撤廢の輿論の生じた事實は、輿論の變化著しい點をよく裏書せるものであつた。

三、社會理想　社會的自我意識を理智的要素の支配する限り、社會理想と見る。國家の場合それは國是である。社會理想は集團本位的な判斷形態であるから、集團生活の向ふ所を示す觀念的存在と考ふ可きであり、最も適當に集團の生活原理と稱し得るものである。社會理想はかかるものとして、輿論の如く時々刻々變化するものではなく、寧しろ輿論の目標となる樣な多少恒存的な目的觀念をなして居る。帝國主義とか、王道主義とかいふ民族的理想の如きその適例であつて、モンロー主義、「光榮ある孤立」等いふ各國國是の如きも、その實例である。

その意圖　總べて社會的自我意識の取上げるものは集團全體の問題であるが、個人的自我意識の如く、その目指す所は、第一、社會的自我卽ち自己集團の保存に存し、第二にその發展を願ふ。如何なる集團感情も輿論も社會理想も、自己の集團を解消し沒落せしめやうとするものは皆無である。社會的自我意識は自己集團の保存と發展の目的から、外部よりする自己集團の脅威攻擊を排除し、又集團內部の禍根、問題を解決せんと努める。但し、その際社會的自我意識の抱く思想內容は、從來輿論に就いて誤つて考へられた如く、決して常に賢明であり穩當であるとは限らない。この事は社會的自我意識が一の文化構造物として成立つ發生手續を顧ればつまり明かであつて、そこには內容の適切さを保障する必然的な條件はないのである。殊に集團感情といふ如き形態にあつては、試行錯誤その他の純化條件に於いて缺くる所が多いのである

から、その適切なりや否やは甚しく疑問である。畢竟、社會的自我意識は、恰も個人的自我意識の如く、多くの過誤を犯し得るものであり、之を防止せんがためには、常に批判を怠らず又警戒處置を講じなくてはならぬ。

社會統制と社會組織　集團的保存と發展の目的を以て、社會的自我意識は自己集團の人々に作用し、總べての社會事象を積極的に拘束する。ここに社會的自我意識の制約が行はれ、之を社會統制と呼ぶのである。社會統制は「社會集團の自己統制」と云ふことが出來る。社會統制に手段となるものは政治的行爲及び政治的制度であるが、社會統制によつて部分的諸集團の形成、禁止、改造が行はれ、社會過程も亦奬勵、否認、制限を受け、文化構造物の如きも助成、彈壓、抑制を蒙り、結果に於いて、集團內部の社會事象は全般的に組織附けられる。この內、文化構造物の組織化は特に注目す可きものである。先に吾々は、文化構造物相互の決定あることにより社會形象が統一的に社會性を實現すると云つたが、それは社會秩序と觀念される。社會統制による文化構造物の組織化は、新に社會組織と概念されるのである。

社會統制の基本傾向　社會統制によつて、集團內部に積極的に社會組織が作爲されるのであるが、その場合の社會統制の傾向を次の如くに謂ふことを得る。すなはち、現存社會性を豫じめ承認しその上行はれる統制であれば、それは保守主義である。後期封建時代の社會統制がその例となる。然るにそれと反對に、現存社會性を否認して發動する統制は革命主義である。變革期の社會統制は革命主義たることを特徵とする。保守主義と革命主義の統制が對立し、之に從ひ保守主義の集團或は時代と、革命主義のそれとが區別される。然し、兩者は普通折衷された形を以て行はれるのであつて、その場合に於いて社會統制は折衷主義と見做される。折衷主義の社會統制にして實明ならば、之を改良主義と呼ぶことを得よう。保守主義、革命主義、折衷主義等各種の統制傾向の適切なりや否やは、社會集團內外の狀況如何によつて定まつて來るから、一般的に之を論議し得ないことは最も注意を要する點である。

第五篇　餘　論

第一章　社會學の方法

社會學と方法論　社會學は社會科學に屬する一特殊科學なる關係上、社會科學一般に共通する態度、研究方法並に理論法則構成の仕方卽ち概念構成に準據する所がなければならぬ。今、社會科學一般の態度、研究方法並に概念構成に就いて述べ、之によつて社會學の基本的方法を明かならしめたいと思ふ。

その態度　社會科學の認識と雖も、之は廣く實在科學的研究でなければならぬ。抑々、實在科學は組織的なる學問研究たる許りでなく、對象を經驗界の事象たる限りに於いて取上げ、且之を批判論理的に認識して行くものであるから、古く行はれたやうに、論理を無視し神意といふが如きものから恣意的に說明する神學的解釋等と異る。又對象を論理的に說明するとしても、經驗界以外の本體或は想像物に迄溯つて論じやうとする形而上學等ではない。この意味に於いて、論理的經驗的態度が實在科學の出發點であり、その一部たる社會科學の根本の立場で

もある。

社會科學の獨自性　實在科學的態度は人間現象の研究に先立ち、自然現象の研究上自然科學が模範的に採用した所のものであつた。自然科學は逸早く實在科學的態度を發明し、之を嚴守することによつて今日の發展を遂げたのである。そこで人間現象の研究に於ても、自然科學のこの態度を學び、之を應用することによつて將來の大成を期するのである。とは云へ、自然科學の對象たらしめる自然現象と、社會科學が問題とする人間現象との間には、兩者性質の相違が存するのであるから、根本に於いては共通態度を以て研究するとしても、社會科學の場合、次のやうな獨特の研究方法が成立ち來るのである。

會得法　先づ、人間現象は自然現象と異り專ら意識的現象であるから、之を取扱ふ場合において、精神科學的方法が採用されねばならぬ。總べての精神科學の如く、社會科學に於いても現象を意味的に會得する必要を見るのである。

換言すれば、人間現象は精神的現象であるから、自然現象の場合に於ける樣に、之を唯知覺的に卽ち吾々の五官に訴へて捉ふる許りでなく、之を內面的に捉ふるを要する。ディルタイが社會科學に於いて意味會得の必要を謂つたのはこの事であつて、社會科學の基礎方法は意味會得といふことにある。ではあるが、人間現象が本質上意識的精神的現象であるとしても、この現象は現實には自然界內に行はれ、又歷史的姿を採つて存するものであるから、現象に對して單に會得の方法だけを適用するのでは充分でない。すなはち、意味會得の方法に先立ち感官的知覺的把握が行はれ、或は之を意味會得の方法と併せ行ふことを要求されるのである。

かくて社會科學が研究對象を把ふる場合に於いて、單なる知覺の外、會得の方法が必要となる。そして、それが實際に適用されて、現在の現象に對しては觀察法、又過去の事實に對しては歷史的觀察法なる歷史法が現はれ、他方、特に意識精神の動きに對し知覺的方法として內省法、會得的方法として內省法が成るのである。

理論的法則的認識上の諸方法　社會科學はこれ等の方法によつて對象が如何なる狀態にあるかを突止める。特に記述的認識は、この程度の認識を以て滿足すること少くないであらう。史學、現象學等の研究はすなはちその例であつて、この方面の研究は純然たる記述的認識だけで終るを見るのである。併し乍ら多數の場合にあつては、この種の記述的認識以上に進むことを

必要とするのであつて、そこに事象の理論的説明が要求され、又その説明も法則的に行ふ必要を生ずるのである。そしてその様な場合に於いては、一層複雜な事象の觀察が要求され、又高度の會得の必要を見る。多數の事象を比較研究する比較法とか、多數の事象を數量的に觀察する統計法とか、或はある種の假定を想像的に描き出し事象の展開を説明する想定法の採用等、その結果である。

概念構成上の諸方法　かくて社會科學に於いて觀察法、歴史法、心理法、內省法、比較法、統計法、想定法等が成立ち、これ等多數の方法から社會科學の法則的理論の構成が可能とされるのであるが、抑々社會科學の對象は人間現象であつて、自然事象の如く簡單なものでない關係上、社會科學の概念構成、殊に法則構成上重大なる問題が存し、愼重なる注意が要求されるのである。それを次々に説明したいと思ふ。

意志の自由　第一、人間現象の主體たる人間は、彼の主觀において行爲の自由を感じつつある。之は意志の自由と呼ばれるものであるが、かかる主觀的自由感の存在は、人間が客觀的にも自由であり、因果關係の外部に立つを結論するものではない。そこでヴインデルバンドの如く、人間は主觀的に自由を感ずるに止り、客觀的にはなほ不自由であるとするとの見方を生ずる。確かに人間は主觀的自由感を有すること故に、客觀的に因果關係の外に立つ者では無い。然し客觀的因果關係と雖も、吾々人間が二つ以上の同等のチャンスの存する場合に於いて、右するか左するかを自由に選擇すること迄を不可能ならしめるものであるまい。行爲の自由は獨り主觀的たるに止らず、屢々客觀的にも成立つと見る可きものと思ふ。そこで人間の場合、行爲選擇の自由は或る程度迄之を認む可きであるが、之を認めるならば、人間現象の法則は如何にして求められるかといふことが、却つて問題となつて來るのである。然るに、この問題は次の如くに解決されるであらう。すなはち、社會科學は行爲選擇の自由を超越する人間現象の一般的傾向を理論化すれば足るのであつて、人間現象に向つて、一般的觀察法を施し、法則概念の構成を行ふことが要點となるのである。

現象の複雜性と概括法　第二、具體的人間現象即ち歴史的社會的現實態と呼ばれるものは複雜極まりなき事實であるから、同一種類の現象の間に於いてさへ、その組成要素の間に幾多の差異點が認められ、共通性は甚だ稀薄なるを免れない。例へば同じ革命であつても、フランス

革命とロシア革命とは、夫々組成要素に於いて極度の相違を現はすであらう。從つて、同一種類の事實間に共通性を求め、それによつて法則概念を構成する自然科學的方法を、この場合に對して應用するは不可能となつて來る。社會科學の場合に於いては、幾多の異分子や關係要素を控除し、或はこれ等のものを假に同一と見做す手續をとつて、辛じて大まかな法則を樹て得るだけである。この仕方を概括法と名づける。唯、その結果成立つ概括法則は、具體的個々の現象に對し極めて間接的、迂遠な說明にしかなり得ないのであるから、この缺點を可成的に緩和し直接的、的確な說明たらしめんが爲には、對象たる人間現象に就いて文化的範圍を限定することが必要となる。すなはち、この手續を採れば、人間現象に對し最大の差異性を與へる文化要素を略ぼ一樣ならしめることが出來、從つて同一文化範圍內の事實に對し稍々適切なる法則樹立の望みが成立つ。同一文化の下にある限られた時代、限られた場所の現象に對する概念構成が、この意味から推稱される。

價値關係法　第三、社會科學の研究が或る種の現象要素を除去して理論を樹立するは、全く別の方面から支持される理由を持つて居る。これ人間現象を觀察說明する場合、吾々が廣く或る種の要素の參加を重要と考へず、寧しろ彼等を看過し或は故意に閑却して、吾々が一層意義ありと思惟する他の諸要素だけを留保選擇し、之によつて却つて滿足な認識が行はれるからである。例へば、或る戰爭の勝敗を說明するに、之に參加せる敵味方兩軍の士氣如何だけを擧げ、他の關係要素は之を等閑に附して說明を行ふ如し。リッカートはこの樣な認識の仕方を價値關係法と名づけたのであるが、價値關係法なるものは、人間現象の主體たる人間自らこの現象を解釋說明する者である關係上、總ての現象要素を數へなければ事實が說明されないといふ困難なく、寧しろその內の特別要素だけを擧示するなら、事實の展開が解釋出來るといふ所から來て居る。孰れにしても、總べて社會科學の理論は漫然と概括的に構成されるのでは無い。價値關係的に樹立されるといふ可きである。

理想型化の方法　第四、吾々が文化範圍を限定する仕方や、價値關係法を用ゐるとしても、對象たる人間現象間の相互差異性は完全なる意味に於いては、除去され得ないのであるから、社會法則樹立上、前述した概括法はなほ根本的に必要であらう。然し、概括法が現象に對し共通性を探究する自然科學の仕方を適用するならば、多數の有意義なる要素が失はれ、その結果

に於いて空漠なる形式的法則に陷ることを避け得られない。この缺點を未然に防ぎ、個々の現象に對し可及的適切なる法則を樹てることが必要であるが、之がためには現象中有意義な諸要素が最も理想的な展開を示す所の狀態を觀念上の擬制として作り上げ、この理想概念を以て個々の事實をカバーするを心掛けねばならぬ。詰り、理想狀態の關聯を觀念的に描き、個々の現象をこの法則概念に概括する方法を採用せねばならぬ。そこに作られる法則概念の性質を、ウクス・ウェーバーは理想型と稱した。總べて社會科學の法則は理想型たる性質を持つのであつて、經濟學に見る需要供給の法則にしても、社會學に於ける革命法則にしても、皆理想型化の方法の產物に外ならないのである。

社會法則と豫見　社會科學の法則は以上の手續から成立つからして、之を自然科學の理論に對照する時、著しい特質が認められる。先づ最初に、社會科學の理論は自由意志を算定に加へないのであるから、事象の必然的理論ではない。このことは、社會科學の理論が人間現象に實際參加する自然的、文化的諸要素を捨象して樹てる大まかな概括法則であること、それが價値關係的法則であること、又それが理想型概念であること等から、幾重にも結論される。かくの如く、社會科學の法則が事象に對する必然的理論でないのは、それが自然科學の法則と異り、將來の事實を確定的に豫言し得ないことを意味する。將來起り得可き現象は、社會科學的法則理論を以てして一般的に推定されるに止り、決定的豫斷は與へ得ぬのである。

社會法則の根本型　かくて、社會科學の法則は事象に對し單に傾向律として妥當するだけである。そしてそれが理想型概念たるは、之を個々の具體的事象の側からいへば、彼等がこの法則的理論の不完全な實例であるといふ關係を示す。社會科學の概念はこの限定的意味の下に、具體的事象に對し法則的理論をなす。仍て、自然科學の理論である自然法則が事實の共通性に從つて樹てられる類の概念たるに比して、社會科學に於ける法則は型の概念なりと云へる。併し乍ら、型の概念として社會科學の法則はなほ一種の一般概念であるから、個々の人間現象の史學的研究を行ふ場合、發見誘導的概念として必要なるのみならず、又一般概念そのものとして法則それ自體に價値を認められる。將來の現象の成行等に就いても、條件附きであるが、或る程度それに依賴し、科學的豫測を樹て得るのである。

第二章　社會學史（前期）

社會學の發達　社會學とは十九世紀の中頃、始めて確定的形態を採るに至つた社會事象の科學的研究であるが、研究分野が相當廣汎に亘り、又これを實在科學的に研究するに當り、態度、研究方法、概念構成等に關し幾多複雜な問題が存したのであるから、專門研究者の間に於てすら見解の一致を見なかつた多くの點があり、その結果、社會學の學問的性質に疑惑と誤解とを生じたことさへあつた。社會學研究のその後の進歩は幸ひこれらの疑惑を一掃し、又多くの誤解を解消して來た。かくして、社會學が人間の營む社會集團、社會過程並びに社會形象等、人間關係的事實、現象の實在科學たることは、充分認められるに至つて居る。

社會學史の必要　然るに現行社會學の性質を明かにし、又之迄獲得された理論法則を吟味し、今後の研究の手懸りを得ぬきがためには、社會學の過去の學說の研究を忽せになす可きでないのであつて、この意味に於いて社會學史の考察がなされねばならぬ。社會學史は精神史上、社會學が如何にして發生、發展して今日

に至つたかを詳にすると同時に、個々の社會學的研究と理論の發達、進歩を跡づける研究である。そこで社會學史の研究は、學說區々に赴き易い社會學の如き科學に於いて特に必要な研究的一部門を作る。社會學史はその研究範圍廣汎であるが、ここには一般學說の展開だけを述べたいと思ふ。

古代の社會研究　社會學の名はフランスの學者オーギュスト・コントが最初に提議した所であつたが、實質的な社會研究は遙かに彼の命名に先立つて行はれて居つた。或る意味に於いて、社會事象の考察は人類そのものと共に古いと云ひ得る。少くとも古代文化諸民族に於いて、社會事實、現象に關する考察は夙に着手されて居つたのである。かくて、ギリシヤ時代それは大に進歩し、プラトン、アリストテレス等が國家論、政治學等の名を以て社會事象を論じたことは著しい事實であつた。プラトンが理想國の說を試みたに對し、アリストテレスは歷史的な現實事實に觸れたのである。彼等の研究が實際問題に關係して居り實踐態度を濃厚ならしめたことは、東洋古代に於ける國家乃至社會の考察と一致した點である。かくの如き實際的態度は永く社會研究の大勢を支配したのであつた。

中世の研究　ヨーロッパ中世時代に於いては、一切の問題は宗教的に解釋され、社會研究も亦、神學的色彩を附與されるやうになつた。神の意志と啓示とが總べて社會事象說明の鍵であつたのである。又、近世初頭の合理主義哲學に於いて社會の問題は形而上學の課題として考察され、研究は本體論的觀點に於いて扱は

れた。併し乍ら社會學は實在科學的研究として、對象を經驗し得る社會事象に限り、且之を批判論理的に認識して行く研究であるから、自然科學が確定的地歩を學問上に就いて占むるに至らぬ間、根本的態度そのものが準備されず、本來の形を以ては未だ成立し得なかつたのである。

近世の研究　ベーコンは近世の初、人間自らの社會事象も、人間的偏見を捨てて自然科學的に研究することの必要を提唱した。今日より見れば、彼の主張は社會學に對し礎石を置く所のものであつた。ではあるが、ベーコンのこの提唱に從ひ、當時支配した合理主義哲學を排し、經驗主義の立場を以て社會事象を研究した實際の試みは、英國第十七世紀後半に漸く勃興したに過ぎなかつた。その頃の國家、社會の研究は國家、社會の自然論としてよく實在科學性を示したのであつたが、この傾向は第十八世紀を迎ふると共に愈々躍進的氣運に入り、獨り英國に於いて一大勢力となり來つたのみならず、フランスにも傳播し、フランス思想家モンテスキューその他も亦それに化せられるに至つたのである。この間、ヴィコーによつて歴史は反復するとの見解から歴史哲學が創始され、フランス重農派、アダム・スミス等によつて經濟學が基礎を置かれ、モンテスキューによつて比較法學が着手された等の事實は、時代の動きを如實に語るものであつた。

サン＝シモンとコント　フランスに於いて如上の機運が確乎たる根蔕を下したのは、コンドルセがこれ等新しい社會諸科學と歴史哲學との綜合を試みた後のことであつて、サン＝シモンの時代即ち十九世紀初頭のことである。サン＝シモンは社會の生理學的研究を推稱し、社會事象の實在科學を構想した。然し、彼に於いては、彼自らが社會思想の父と稱せられる樣に、その構想が社會改造の意圖と不可分的に結合して居つたのであるが、彼の門下から出たコントに至つて、實在科學的部分が判然と區別され、理論的體系が提出されたのである。多數の學者がこの理由によつて、彼に對して社會學の創始者たる名譽を認めるは至當のことである。

コントの學說　コントは彼の學說を實證主義と名付けたのであるが、之は實在科學的態度を謂ふと共に、實在諸科學の知識を綜合した統一的認識の稱でもあつた。彼は個々の科學の研究結果を、高度の統一的理論に綜合する精神活動を以て哲學と考へて居た。彼は數學、天文學、物理學、化學、生物學、社會學等、實在諸科學の結論を綜合して哲學的統一認識が成立つと見たのであるが、その内社會學は研究對象が最も複雜した宇宙的總合現象であり、この點から窮

極的科學であつて、それ自ら實證主義哲學を實現するといふのであつた。

社會靜學と社會動學　コントは人類全體を社會と見做し、人類社會の諸部分が調和關係を現し、全體として神學的段階、形而上學的段階及び實證主義的段階を通過して進化すると見做した。人類社會の諸部分が調和關係を現はすとしたのは社會秩序の觀察であり、これが全體として三段階を通して發展ずるとしたのは社會進化の議論であつたが　この社會秩序と社會進化の二研究が、コント社會學の體系中に社會靜學と社會動學の二部門をなした。彼は專ら社會動學を考察し、前記のやうな社會進化の三段階の法則を樹立したのである。コントは社會學に經驗的論理的態度を確定し、それに基いて研究を行つたが、社會事象を宇宙的總合事實たる意味に於いて取扱つたのであるから、彼の社會學は總合科學的色彩を濃厚ならしめたのである。

スペンサー　コントの如く總合科學的研究を行ふ場合に於いては、先づ何らか宇宙的法則を前提し、社會學的理論をその適用として樹立するのが、陷り易い陷穽となるであらう、スペンサーはコントと同時代に於いて社會研究に志した者であつたが、彼は實にこの傾向に陷り、宇宙的進化を構想し、その構想に對應する意味で社會進化を論ずるに至つた。この傾向は獨りスペンサーのみならず、總べての初期社會學者に共通の特色をなした。又之と平行して、經驗的論理的態度に於いて一足先に發達した自然科學の諸理論を研究上應用するを以て社會學の唯一信賴す可き方法なりとする見方をも生じ來つたのである。

力學的社會學　初期の社會學者が好んで社會事象を自然現象に關係せしめて考察するは想像以上であつたが、その樣な研究を總べて自然科學的社會學と稱する。就中自然科學的社會學として問題となるものは力學的社會學、人種學的社會學、地理學的社會學、生物學的社會學の諸派であるが、その內、力學的社會學は、スペンサーが又代表者であつた。彼は物理法則を宇宙の根本法則と考へ、一切の社會事象もそれから說明し得ると考へた。彼は總べての運動が最小抵抗と最大引力の線に沿ふて進むと見做し、この力學的原則から社會事象を說明せんとした。彼によれば經濟現象の如き最小の努力を以て最大の收獲を擧げんとする事から成り、如上の法則の發現に外ならぬのである。

人種學的社會學と地理學的社會學　社會事象が人種の性狀から說明されるとするは人種學的社會學であつた。ラブーヂによれば歷史は人種から說明される。人種は征服によらなくとも內

部的に變化するのであるから、自然淘汰の不充分な文明社會の將來は暗黑であるとし、優生學的方策を提議した。アモンも亦、社會事象が人種によつて支配されるとした點に於いてラプージと等しかつたが、彼は寧しろ自然淘汰と社會淘汰の協力あるを認め、社會の將來を樂觀したのである。人種學的社會學に反し、寧しろ地理的環境が社會事象を說明するとしたのは地理學的社會學であつた。この傾向は始めフランスのル＝プレー派によつて代表されたが、ドイツに於いてラツツエル出づるに及び、「人は大地の一片なり」といふ標語の下に、大規模の研究が行はれたのである。

生物學的社會學　生物學の理論を基準に社會研究を企てたのは生物學的社會學であるが、その內ダーウィンの生存競爭說に基くものは、特に社會ダーウイン主義と呼ばれる。社會ダーウイン主義は各國に傳播したのであるが、個體的生存競爭を論ずることに始り、次第に集團的競爭を重視するやうに進んだ。且又、社會事象が生物的事實以上の意識的現象であることは、生存競爭說が全體的には許容され得ないのを承認せしめる樣になつた。生物體と社會との間に發見される幾多の類似點に注目し、社會事象を生物學就中、動物學の理論を以て類推的に研究せんとしたのは社會有機體說であつたが、スペンサーが又この見地に立つ學者であつた。彼は生物體と社會との間に、成長發展、構造の複雜化、機能の分化及び相互依存、仲介機關の成立、全體の生命と要素の生命の相互的獨立等の類似點存すとしたのである。然しスペンサーは、之と同時に、生物體が凝結的全體をなすに對し、社會は分散的全體をなすこと、並に社會にあつては生物體に於ける樣な意識の集中性なきことに兩者の間に重大な差異點あるを注意し、必ずしも社會有機體說的を徹底せんとはしなかつたが、他の論者はスペンサーの擧げたこれ等の差異點をも否認し、生物學的理論の類推を極端に實行せんとした。リリエンフェルトはその代表的學者であつて、彼に於いては、社會學は生物學の一部門たる以外存在理由を有せずとされたのである。社會有機體說の誤謬は社會構造の事實が生物體の有機的構造に似通ふ所に注意を奪はれ、人間關係的事實たる社會事象を細胞的構造の生物體に過ぎずといふ突飛な見方に出でたことにあつた。從つて社會學的認識の進むと共に、第十九世紀の終りに至つてこの說の一般的に放棄されたのは、寔に當然過ぎる事であつた。

第三章　社會學史（後期）

二十世紀の社會學　コントの學說、社會有機體說等、初期の社會學は皆社會事象の具體的關聯の全包括的研究たる特色を具へた。この時代の研究の特徵は實にこの點に認められるであらう。然るに二十世紀の開幕と共に社會學の規模をその樣に全包括的なものとせず、社會諸科學內の限定的な一科學として確立しやうとする運動が擡頭して來た。この新傾向は最も中心的、且本質的社會事象を專門的に研究する所に特徵を有し、又この點に新機軸を示したのである。古い社會學が總合的研究たるに比し、新傾向は特殊科學的立場に立つ。かくて、フィアカントは舊型の社會學を歷史哲學的百科全書的社會學と稱し、新興社會學を以て分析的形式的傾向と稱したのである。

綜合社會學　新傾向の研究として心理學的社會學、形式社會學、現象學的社會學等諸々の企圖が興つた。彼等は皆特殊科學的傾向を濃厚ならしめ、又屢々嚴密なる個別科學の形態を採るものさへも存したのである。然るに、これ等純然たる新型社會學成立の前後に、舊來の總合的研究に接近し、而も新傾向の持つ特殊科學性をも或る程度具備する過渡的中間形態として綜合社會學が存したのであるから先づ之に就いて說く所がなければならぬ。綜合社會學とは何か。之は社會諸科學の研究結果を總括したり、或は自ら人間現象を總觀することによつて、現象の最も普遍的理論或は法則樹立を目的とするものであつた。或る意味からすれば、かの宇宙論的諸體系や社會有機體說の研究等も、綜合社會學に接近した立場であつたと云ひ得られやう。その理由は、彼等が人間現象に對する一般的理論の樹立に努めたからである。唯新らしい綜合社會學の特徵は、最早や宇宙論とか自然科學を前提たらしめる所なく、心理學的觀點に立ち、心理的方面から人間現象に對する一般理論を建設せんとした點にあつたのである。

ホッブハウスとパレトー　比較的有名な綜合社會學の代表者としてホッブハウス、パレトー、オッペンハイマー等を擧げ得るであらう。ホッブハウスは社會進化に重點をおき、社會的發達の過程に於いて、合理的善が次第に實現される所以を說いた。彼は完全に發達した文明狀態に於いては人間諸能力が調和的に展開するを信じ、之を論證す可く社會哲學的考察を施したので

ある。パレトーは社會學が論理的、經驗的である可きこと、即ち實在科學たる可きことを力說し、ホップハウスに認められた哲學的態度を淸算して居つた。之は著しい進步と見る可きものであるが、パレトーは研究問題として人々の心理的原動力と言論的表現の二大要素が、利害關係と社會構造とに對し如何なる均衡關係を現はすかを取り上げ、この問題に關して最も實在科學的な研究を試みたのである。然し問題は可成複雜したものであるから、彼自身、研究上成功を收めたのはその一小部分であつて、綜合社會學への準備的研究だけのものに終つた。

オッペンハイマー　オッペンハイマーはどうであるか。彼は社會學が社會過程を全體として攻究し、社會諸科學共通の限界領域の研究なりと考へ、この意味からして、社會學は社會諸科學の單なる集合ではなく、社會諸科學の綜合的研究なりといふ見方を採つた。彼は綜合社會學を最も明瞭な形式で代表したが、研究內容に至つてはこれ迄社會學の名の下に研究され來つた所の人間現象の一般的理論を擧示する以上に出でて居らないのであつた。見來るならば、綜合社會學の傾向は、或は社會哲學に陷つたものであり、或は今後に於いて大成するであらう綜合的認識に對し强ゐて或種の努力を拂つたに止り、或は既に定說となつて居る諸理論を羅列するに終つたと考へねばならぬ。社會學が有效なる科學的任務を果す可きためには綜合社會學から遠ざかつて、固有の直接的問題を持つ可き所の必要が起る。この反省は漸次に行はれて行つて、その結果、特殊科學的形態を採る社會學建設の運動が芽生えることとなつた。心理學的傾向に於いて、特殊科學的新企圖は勃興したのである。

タルド　第十九世紀末、フランスにタルドが出現すると共に、心理學的社會學の研究に着手し、多くの追從者を出すこととなつた。社會事象が核心的に心理現象であること、從つて社會學が、心理學的社會學たる可きを唱道せるはタルドであつて、社會學の新生面が彼によつて打開されて行つた。タルドは特殊科學としての社會學を確定せんが爲、その對象として基礎的社會現象を尋ね、之が模倣と稱する心と心との關係現象に存することを云つた。彼は心と心との關係現象、特に模倣現象から凡ゆる社會活動は說明出來るとしたのである。タルドの社會學は社會過程の研究にあつたと考へ得るが、彼はこの方面に於いて模倣中心の諸理論を提出し、少からざる貢獻を行つたのである。

デュルケム　タルドとは異り、而も同じく特殊科學の試みに出た者はデュルケムであつた。

デュルケムは社會有機體説の觀察を取入れ、社會生活を支配影響する社會形象の存在を注意し之を集團表象と名づけ、之を中心として社會學研究を行ひ、多大の功績を殘すこととなつた。彼は、社會形象の拘束作用を認めないならば、社會事象の認識は全く不可能なりといふ見地に就き、各方面の研究を以てそれを立證したのである。今日、「社會分業論」以下の彼の著述が尊重され、又彼の影響下に立つ研究者の多數なるは、決して謂れのないことではない。

ギディングス　タルド、デュルケム等が夫々社會過程と社會形象に重點を置いて特殊研究を行つたに對し、ギディングスにあつては、同類意識説を採ることによつて社會集團を中心とする研究に出でた。ギディングスはタルド、デュルケム等と研究方面を異にし、併し乍ら彼獨自の研究内容を發見し、社會學の特殊科學化運動に彼等と共に協力したのである。畢竟、これ等の學者によつて社學會の主要問題は示唆せられるに至つたのであつて、社會學は特殊科學として次第にその面目を整へたと見做される。而して、ドイツに於ける研究の發展は、この傾向を更に急激に助長することとなつた。

テンニース、ジムメル　フランス、アメリカに於ける心理學的社會學の擡頭と呼應してドイツに於いてはテンニースが現はれた。彼は社會集團と社會形象を通じて、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトの兩範疇を區別し、就中それによつて社會集團の基礎原理を照明するに貢獻した。然し如上諸方面の研究が果して如何なる一般的原理の下に統一され、以て獨立した一個の科學たるを立證するかに就いては、ジムメル以前の研究家は未だ滿足なる案を用意しては居らなかつた。ジムメル出づると共に、彼はこの點に對して鋭い反省を行ひ、遂にそれに對する解決の一案を與へることとなつた。ジムメルは、特殊科學的社會學の對象が人間間の心的相互作用の形式にあるを説き、それによつて人間關係事象即ち社會事象の眞相を顯現して行つた。彼は現代社會學に指導概念を與へた者であつて、この點彼の寄與した所は大なるものがある。唯彼以後、彼に則る學者、即ち形式社會學者達は、フィアカントにしてもヴィーゼにしても、研究を行ふに當つて、彼等の問題を社會集團或は社會過程の抽象的研究の方面に選び、その結果として社會形象の問題を忘れ、又社會集團、社會過程に就いても、事象の歴史的具體的考察を閑却する傾を强めたのであつて、形式社會學のこの缺陷に對する正しい反動として、文化社會學の研究が登場して來ることとなつた。

文化社會學　文化社會學の新傾向はシェラー、アルフレッド・ウエーバー等に代表者を見出す。彼等はジムメル以後の形式社會學派が等閑に附して居た社會形象に研究問題を選んだ許りでなく、同時に形式社會學に見る樣な純粹社會學の研究以外、事象の具體的歴史的樣相を好んで研究に加へ、進んでこの方面を開拓する特色を有したのである。それであるから、この新傾向は純粹社會學の外、現實社會學の研究を行はんとする運動でもあつて、この點に於いてドイツに於けるゾムバルト、マクス・ウエーバー等の歴史社會學の研究や、米國に發達した社會調査と呼ばれる社會誌學の研究と密に結びつく理由を持つのである。

我國の研究　社會學研究の今日に於ける大勢は略ぼ右の如く觀察されるのであるが、我國に於いては、先に建部(遯吾)博士の人格有機體觀に立脚する社會學體系があり、之は宇宙論的なると共に綜合社會學的傾向を濃厚ならしめた。之に次で遠藤(隆吉)博士は社會を見るに意志結合であるとの說を採り、氏は之によつて社會集團以下の社會事象を說明せんとしたのである。既にこの意志結合說は社會心理學的傾向を代表せるものであつたが、同じくこの傾向を採つた米田(庄太郎)博士は遠藤博士と異り、反つて社會過程を重視し、社會過程研究を主題として社會事象を考察する態度に出でた。爾來、心理學的傾向は我國に於いても支配的傾向を作つたのであるがその傾向の內に、高田(保馬)博士は社會集團の研究に主力を盡し、形式社會學運動に重要な貢獻を致した。ではあるが、最近の我國社會學界の傾向は、形式社會學に對するよりも文化社會學方面により多くの關心を有し、又之と同時に現實社會學の研究の興隆する狀勢を示して居る。

現行社會學　思ふに、社會學が一特殊科學として存するは當然の事柄であらう。ではあるが、社會事象そのものの多面性からして、社會學を形式社會學に見た如く、唯單に社會集團乃至社會過程の研究、殊にその抽象的研究のみに限定するなら、それは文化社會學が反對する樣に、一半の重要なる研究分野が不當に放棄される結果とならう。吾々は學說の進步を跡づけると共に、眞正なる社會學の研究が社會事象を對象たらしめることによつて、形式社會學と文化社會學とを統一的指導概念の下に置き、一方に於いて抽象的研究、他方に於いて具體的研究を行ふ所の體系的一科學として存在し、以て吾々人類の認識遂行上、その責務を全ふす可きであることを確信する。

割當事務庁
譲渡図書

昭和二十三年五月二十日印刷
昭和二十三年五月二十五日發行

定價 六十五圓

著者 松本潤一郎
東京都文京區元町一ノ一五

發行者 牧野武夫
東京都文京區諏訪町五六

印刷者 奈良直一
東京都文京區諏訪町五六
株式會社 常磐印刷所

印刷所

乾元社印刷

發行所 東京都文京區元町一ノ一五 乾元社

乾元社刊行書

瀧澤克己著	西田哲學の根本問題	B版二八〇頁	價八〇圓 送十圓
法學博士 瀧川政次郎著	日本奴隷經濟史	A版六〇〇頁	價二五〇圓 送十圓
瀧澤克己著	哲學と神學の間	B版五二〇頁	價一六〇圓 送十圓
文學博士 松本潤一郎著	現代社會學說研究	A版三六八頁	價一八〇圓 送十圓
法學博士 瀧川政次郎著	日本社會史	A版四二〇頁	價二〇〇圓 送十圓
瀧澤克己著	カール・バルト研究	A版五二〇頁	價二二〇圓 送十圓

33. 7. 29

乾

02